愛と死の真実

塩川香世

isbn978-4-908193-13-2

c0010　　¥1000E

定価1,000円＋税

愛と死の真実

塩川香世

はじめまして

皆さん、こんにちは。
私は塩川香世と言います。
1959年3月9日、亥（い）年生まれの58歳です。
私はどこにでもいる普通の平凡な女性です。

そして、普通で平凡だからよかったとつくづく思っています。それというのも、私に何かひとつでも秀（ひい）でたものが備わっていれば、今、私が心に感じ心に見えている道を真っ直ぐに突き進んでいくことは、おそらく甚（はなは）だ困難だったと思うからです。それほど、これから語らせていただく内容は特異な内容だと私は思っています。
目に見えて耳に聞こえる中に今、存在している私達にとって、本当のこととは何か、何が本当の喜びであり幸せであるのかを自分の心で選び取っていく難しさがあることを、最初に断っ

ておきたいと思います。

　ところで、今は、どのようなことも、インターネットで検索をすれば、様々な情報を得ることができる時代です。

　居ながらにして、様々な情報を入手できる利便性や楽しみを共有できる時代です。

　その一方で、それらがもたらす弊害も、多方面にわたって起きていることは否定できませんが、パソコンやケータイ、スマートフォンといわれる分野は、これからもどんどんと私達の日常生活の中に入ってくるでしょう。

　そうなってくれば、その波に取り残されるかのように見える人達は、あたかも社会からドロップアウトしていくように思われますが、果たしてそれはどうなのでしょうか。

　その時々の時代の波に乗り、それをうまく活かしていく人達の人生は、本当に幸せで喜びで豊かな人生なのでしょうか。

それで、私は、ひとつここで提案させていただきたいことがあります。それは、今、あなたの周りに氾濫（はんらん）する雑多な情報を、少し横に置いておいて、あなた自身が、あなたに聞いてみる、あなたの心を覗（のぞ）いてみる、そのような静かで贅沢（ぜいたく）な時間と空間を、毎日の生活の中で少しずつ作ってみませんかという提案なんです。

ケータイやスマートフォンが手放せない、パソコンがなければ一日が退屈だ、今は、それが当たり前の時代なのかもしれません。当たり前と笑って済ませている間はまだいいけれど、中には、それらを手放せないという状態が中毒状態にまでなって、楽しむどころか実際には悩み苦しんでいる人達も多いのではないでしょうか。

だからこそ、そういうものは程々にして、もっと、自分と真正面から向き合う時間が必要なのではないかと、私は、そう感じています。

あなたも、何にも頼らずに、ただゆったりとして、自分の心に感じるもの、響いてくるものに思

いを傾けてみるということをやってみませんか。

　振り返ってみると、あなたの毎日は、目の前のことだけを追いかける毎日ではありませんか。

　あなたは、自分を大切にしていますか。

　自分を大切にするとはどういうことなのでしょうか。分かっていますか。本当は分かっていないから、自分のことを大切にしているようで、していない人が多いと私は思っています。

　しかし、私達人間は、本当の意味で、自分を大切にしていかなければならない時をすでに迎えているんです。これからますますそういう促しをみんな受けていくだろうと思っています。

　自分と真正面からしっかりと向かい合わなければならない時が、遠からずやってくると、私は感じています。

愛と死の真実／目次

はじめまして　1
あなたは、寂しくないですか　6
宗教書ではありません　14
愛とか死という言葉から何を連想しますか？　42
男と女の愛　45
親子の愛　52
煩　悩　57
私達は肉の愛しか知らなかった　65
本当の愛が知りたい　72
心の奥深くに届く愛　81
なぜ、人は愛を求めるのか　87
愛すること　98
死ぬこと　108
本当の自分との出会い　118
真実を見つめて　133
愛と死を語っていけば……　144
思いに忠実に……　154

あなたは、寂しくないですか

あなたは、寂しくないですか。

ひとりぼっちを感じていませんか。

仕事も私生活も順調なのに、そして、自分の周りには、たくさんの友達がいて、毎日が充実しているはずなのに、ふっとしたときに、心に空洞、つまりぽっかりと空いた洞穴（ほらあな）を感じたことがありませんか。

無性（むしょう）に寂しい思いとか空しい思いとかを感じたことがありませんか。

仕事にどれだけのエネルギーを注いでいっても、お酒を飲んで、ゴルフのクラブを振り回して、歌を歌いまくっても、旅行に、食事に、買い物、スポーツなどに興じどんなに贅沢三昧（ぜいたくざんまい）の時間を過ごしても、または、バーチャルの世界（仮想世界）に自分をのめり込ませても、どこか、何か冷めている自分があることを感じていませんか。

安心してください。
寂しいのは、あなたひとりだけではありません。
みんな本当は寂しいのです。
人は、根源的に寂しいのです。
寂しいから、人は、絶えず、何かを求めて彷徨(さまよ)っています。
そして、自分の心の寂しさをストレートに表現できる人もあれば、屈折した形で示していく人もあると思います。

しかし、ここでひとつ問題があります。
それは、人は、「自分は寂しい」ということにも、なかなか気付けない場合が多いということです。
たとえば、超過密スケジュールで時間に追われ、一日の時間が足りないと思うほどに超忙しい毎日を送っている人達に、「あなたは寂しくないですか」と尋ねても、「寂しい」とすぐに答えが返ってくることは少ないはずです。むしろ、その反対かもしれません。

「充実しているよ。そんな寂しいだなんて思ってみたことがない。それよりも人生楽しいよ。もっと、もっとやりたいことがいっぱいあるんだ。人生って一度きりなんだから、やりたいことをしないとね。」

たとえば、このような答えが返ってくるのではないでしょうか。

本当は、寂しいって、どういうことか分からない人が多い、いいえ殆(ほとん)どの人はそうだと思います。

みんな分からないから、分からないまま、何かにエネルギーを傾けていってしまう、何かにのめり込んでいってしまう、こういうことではないでしょうか。

中には、このまま行けば破滅だと感じていても、あえてその道を選んでしまうことだってあると思います。

はたから見れば、何てバカなことをと思うことや、そして、当の本人にも、なぜだか分からないけれど、どうにも止まらない、止められないこと

が、確かにあるように思います。

　それでは、なぜ、人は、根源的に寂しいのでしょうか。

　これが分かれば、人は、本当に寂しくなくなるのでしょうか。

　私は、きっとそうなると思います。

　本当に分かれば、そうです、心で分かれば、きっと根源的な寂しさに、グッドバイ、決別ができると思います。

　だから、逆に言えば、そうならなければ、いつまでもどこまでも、寂しさを引きずっていってしまうということになるでしょう。

　寂しさを引きずりながら、それを癒(いや)すもの、それを紛(まぎ)らわすものを永遠と探し求め続けるのだと思います。

　現に、愛、優しさ、温(ぬく)もりを、人は求めてきました。

　しかし、寂しさを引きずりながらでは、決して本当の愛は分からないのです。本当の優しさ

も温もりもまた同じです。

本当の愛が、優しさが、温もりが分からないから、結局は、寂しい自分はそのままで、永遠に寂しさを引きずっていくと、私は思うのです。

そうです。私達人間が今のままだと、根源的な寂しさから自分達を解き放つということは、永久的にできないと思います。それは本当に不幸せなことです。

愛、優しさ、温もりを探し求め続けてきたけれど、それらは本物ではないから、私達は本当は広い、広い、限りない広い世界に存在するということに、つまり、本当の自分の世界に出会えないんです。自分が本当の自分を知らない、これほど不幸せなことはないでしょう。

では、「あなた自身、今、寂しくないのですか」と、誰かに尋ねられたら、私は、いったいどのように答えるでしょうか。

本書の初版発刊当時の 2008 年には、本書の

中で、私は『全然、寂しくないと言えば、嘘になります。

　まだまだ、寂しい心、寂しい私自身がたくさんあるでしょう。

　しかし、数年前の私と比べれば、雲泥(うんでい)の差です。

　寂しさの強弱には、天と地ほどの差があります。

　私は、寂しい心をいっぱい抱えて生まれてきました。

　しかも、寂しいって言えずにずっと存在していたことを、私は、私の心で知ったのです。

　そして、なぜ寂しかったのかを知ったから、また、ではどうすればいいのかということも分かったから、今は本当に幸せなのです。』

　これが、私の今の偽らざる思いですと綴(つづ)りました。

　それから約十年の歳月が経ちました。

　今現在の私の思いはというと、寂しいと思う思いがさらに小さくなったと感じています。全

く寂しくないと言ったら嘘になります。

　しかし、確実に寂しい思いから喜びの思いへ、自分の中が移行しています。そして、何かがあるから、誰かがいるから、自分の中の寂しさが薄れ、心が癒（いや）されていくというのは、全く哀（かな）しい錯覚だったと、今ははっきりと感じています。

　さらに、私達人間はなぜ寂しいのか、どうすればこの寂しさから自分は解き放たれるのかを、今しっかりと学んでいくべきだ、学んでいくことが何よりも大切なことだ、そしてそれが自分の本当の人生なんだとはっきりと言えるのです。

　今、私はこのような状態ですが、あなたはどうでしょうか。

　それはさておき、先ほどの私の今の偽らざる思いだとして綴った文章をスムーズに読めない人があると思います。

　たとえば、

「寂しい心をいっぱい抱えて生まれてきたとはどういうこと」

「ずっと存在していたとはどういうこと」
「心で知るとはどういうこと」
　というように、短い文章の中にも、何かなじみがないような、しっくりとこない表現があると思っている人もあるでしょう。
　その人達に向けて、次の章で、心の学びということについて、少し触れてみたいと思います。

宗教書ではありません

私は、かれこれ25年くらい、「心の学び（これにつきましては、この章で順を追って説明しています）」をしています。

　また、この本には、愛と死の真実という何やら大げさなタイトルが付いています。

　しかし、ここで言う「心の学び」についても、本書についても、宗教というものと全く無縁であることを、最初に、はっきりとお断りしておきます。本書は、哲学とか心理学、精神世界、そういう難しいジャンルにも入りません。

　従いまして、本書はどこそこの宗教団体の勧誘書ではありませんので、どうぞ、ご心配なく、読み進めていってください。

「心の学び」というからには、何か宗教だろうとか、何か難しいことをやっているのではないかとか、そう思われるかもしれませんが、そう

ではないのです。

確かに、愛とか心などの言葉が出てくるので、これは宗教かと思われがちです。また、学びというから、何か構えてしまうかもしれません。

特に、若い人達には、愛とか死とか心とか、そんな辛気臭(しんきくさ)いことはどうでもいいじゃない、とりあえず、今が楽しければいい、もっとしたいことも山ほどあるという人も、たくさんおられると思います。

お金を稼いで、恋人を作って、おいしいものを食べて、好きなことをして、おもしろおかしく生きていきたいと大抵の人達は思っているかもしれません。

しかし、どうでしょうか。世の中、そんなに楽しいことばかりあるわけではないでしょう。

何もかも自分の思い通りにいくわけがないし、近頃、何だか物騒(ぶっそう)だし、何かとストレスの多い毎日ではありませんか。こん畜生、あん畜生の毎日が続いていませんか。

そこで、話は戻りますが、この「心の学び」ということについて、少し説明させてください。

私には、これまでに、田池留吉氏という人を中心にしたセミナーを通して、全国津々浦々に、そして、海外にもたくさんの仲間がいます。

宗教の世界、精神世界、あるいは哲学、心理学といったジャンルに属さない私達の学びの輪の仲間がいます。

今は、その学びの輪のことを、ＵＴＡの輪と表現していますが、それは何も特別な世界、一部分の人達が集まっている特殊な世界ではないのです。その輪に入ってくるのに、何も特別なものは要らないのです。

誰でもが入れる輪です。

その輪は、お金も要らなければ、地位や名誉も要らない、男も女も、年寄りも若い人も、大歓迎の輪なのです。

そして、もっと本当のことを言わせてもらえ

れば、実はその輪には、どなたもみんな、すでに入っているのです。

ただ、輪の中にいることに気付けていない人達が、今現在は大半、殆(ほとん)どだということなんです。

その人達に、入会資格も要らないし、入会金も要らない、紹介状も要らない私達の輪を、少し覗いてみませんかとお誘いしているだけです。

あなたが覗いてみても、立ち寄ってみても、私達はあなたから何かを乞(こ)うことはありません。

また、私達の世界は、道徳、規律、規範、慣習、修行といったもので自分の心を縛り、自分を縛っていくことに無縁の世界です。上下関係も一切ありません。

私達は、自由に伸び伸びと、しかし、真剣に、ただ「自分の心を見る」ことをやっていくことを学んできたのです。

ところで、あなたは、この「自分の心を見る」ということを聞かれて、今、どのような感想を

持っていますか。
「心を見る」、何の変哲もない表現です。
　しかし、「心を見る」ということを、これまでに耳にされたことがあるかといえば、案外少ない、いいえ、ないと思います。

「心を見るって、どういうことだと思いますか」
　と、聞かれたときに、
「心を見るということだから、自分の今思っていることを振り返るとか、語ってみるとか、そういうことかなあ。
　だけど、自分が今、心で思っていることって何だろうか。
　そういえば、私が心で思っていることと、実際に話していることとは、最初から最後まで全部、ピッタリ一致しているとは言えないなあ。
　時には、全く反対のことを言っている場合もあるし……。
　まあいいか、どうせ、黙っていれば、私が心で

思っていることは相手に通じないのだから……。」

「なぜ、心で思っていることを、そのままストレートに話すことができない自分があるのだろうか。

　私は、本当はこんなふうに思っているのに、その三分の二も、いいえ、半分さえも言えないのはなぜかなあ。

　ぐっと言葉を飲み込んでしまう自分があって、いやだなあ。こんな私は苦しくていやだ。」

「何で、私は自分が心にも思ってもいないことを、こんなに口からスラスラと出てくるのだろうか。私って怖い。他の人も、こんな感じなのだろうか。心と裏腹なことを、みんな言っているのかしら。」

　こういうふうに、心を見るとはどういうことかと聞かれたことから、あなたの心は、様々な方向に向いて、色々な思いを発していくでしょう。

　たとえば、相手と会話をしていても、今話題

になっている事柄よりも、どこか違うところに、自分の思いが向いているという体験、経験があると思います。

「心」ここにあらずという言葉にもあるように、「心」は、絶えず動いているのです。

朝、目が覚めて、一日の活動をし始めると、目から耳から色々な映像や音が、自分の中に飛び込んできます。

そういうものを見て聞いて、あなたの心は、絶え間なく動き続けているのです。

ということは、あなたは、知らず知らずのうちに、様々なことを思っているのです。それは言い換えれば、あなたは、知らず知らずのうちに、波動、エネルギーを出しているということなのです。ここがおそらく、いまひとつどうもよく分からない部分だと思います。

なぜ、思うということが、波動、エネルギーを出していることになるのかという疑問が出てくると思いますが、その疑問は、それぞれが自

分の心を見るという実践を積み重ねていけば、段々に自分の中で氷解していきます。

結論から言えば、言葉によって自分の思いを伝えなくても、もうすでに、自分の心から発せられた思いは、エネルギーとなって放出されているということです。

また場合によっては言葉で伝える思いとは別の思い（波動）が流れ出ているということも往々（おうおう）にしてあります。つまり、言葉よりも先に波動が流れ出ているということになります。だから、いくら言葉を重ね飾り立てても、先に流れていく波動が問題となるわけです。

波動はエネルギーですから仕事をします。この意識の世界の仕組みを、まだ人間は殆（ほとん）ど理解していません。なぜならば、殆どの人間は、形ある世界が現実だと思っているからです。そして自分自身もまた形あるものだと思ってしまっているからです。物事を形からとらえ、波動の世界をないがしろにしてきた、しているという

のが実際の状態です。

黙っていれば、相手には分からないと思うかもしれませんが、黙っていても思い（波動）は流れています。

また、言葉を重ねることによって、自分の思いは相手に通じているとか、相手を説き伏せることができるとか、納得させることができるとか、そのようにも考えておられると思います。

もちろん、そうすることによって、通じる話もあるし、説き伏せたり、納得させたりする内容の話もあります。

それはそれでいいのです。

所詮（しょせん）、その内容は、形の世界のことだからです。

しかし、肝心要（かんじんかなめ）の部分はそういうわけにはいきません。

たとえば、本当の優しさであるとか、温もりであるとか、喜び、幸せ、愛などというものは、とても人間が用いてきた言葉などでは、本当のところを言い表すことはできないものです。つ

まり、こういうことです。

言葉に乗せて、思い（波動）が流れます。

言葉を使っている人の思い（波動）が、確かに流れます。

そして、問題は、その流れている思い（波動）はどうなのかということです。

たとえば、言葉で喜びとか愛を表現しているけれども、果たして、それは真実の喜び、真実の愛を語っているのかどうなのかということです。

私達は、まず、本当のことというのは、つまり真実というものは、言葉で伝えることができないということを踏まえておかなければなりません。

尤(もっと)も先ほどもありましたように、これは肝心要の部分についてはということです。肝心要の部分について触れていく場合に、言葉を使っている人の土台はいったい何なのかが問われてくるのです。

全く同じ言葉を使っていても、流れ出す波動

の世界は違うということを確認しなければなりません。形を重視してきた私達にとって、それは最大の難関です。

言葉を重視し、言葉に頼って、言葉に縋って、言葉をつかんでいけば、必ず失敗します。言葉に乗せて、思い（波動）が流れているということをお忘れなく。要は波動の問題です。波動の見極めが問題なのです。たったひとつの真実の世界は、言葉では伝えることができないということを、重ねて言っておきます。

もとより、世の中は、形で示された世界が本当の世界だというところから成り立っています。

形で示された世界というのは、目や耳や鼻や舌、皮膚で知る世界です。

特に、人は、目で見て、耳で聞いた情報を基にしていきます。

そして、自分の考えや思いを相手に伝える手段として、言葉を使います。確かに、生活を営んでいくために必要なことは、言葉にしないと

正確に伝わらないでしょう。

　中には、互いに言葉に出さなくても、互いの調子や気持ちが一致するとか、思いは通じ合っているということで、阿吽（あうん）の呼吸ということや、以心伝心ということもあります。

　しかし、それらもまた、所詮は、形で示された世界の中でのことです。その世界を本物としています。

　ところが、そうではなくて、本当に、思えば通じる世界というものがあるのです。

　その世界には、形で示されたものが本物だという思いはありません。形はなく、ただ「思い」があるだけの世界です。

　ここで、少し自分のことを言わせていただくならば、殆どの人が、形の世界が本物だと疑うことがない中で、私は、思えば通じる世界だけが本物だと思っています。

　確かに、目に見えて耳に聞こえて、触れるこ

とができる現実の世界が、ここにあります。

しかし、それは、私が本当に知りたかった世界（意識、波動の世界）を、自分の心で知るために、私自身が用意してきたものに過ぎないことを、私は感じているのです。

私が本当に知りたかった世界（意識、波動の世界）を、自分の心で知るために必要なものは自分の周りに現れてきて、そして必要でないものは消えていくのだと感じています。

だから、目の前に現れたからどう、消えたからどうということに対するこだわりは、薄くなりました。

そして、現れたこと、消えたことよりも、現れたときの自分の心、消えていったときの自分の心の動きを、しっかりと見つめていこうと思うだけとなったのが、「心の学び」を続けてきた結果です。

目に見えること、耳に聞こえることよりも、自分の心で感じ、自分の心に響いてくるものを

道しるべにして、これからの時を刻んでいこう、そうすることによって、私自身が本当に知りたかったことをさらに教えてくれるんだという結論に至っています。

再び、「心の学び」へ話を戻します。

確かに、学びの輪は、今現在、大きく広がっていますが、今の自分の生活なり、環境の中に留(とど)まっている人が大半です。その中に留まっているというのは、やはり、自分の生活なり、環境を重視し優先していく思いが強いということです。

目に見えて耳に聞こえる現実を前にして、自分の心で感じる世界を主にしていくことは、確かに難しいです。

夫であるとか、妻、親や子、そして、その他の自分を取り巻く人との繋(つな)がり、あるいは環境に比重を置きながら、心の学びをやっていこうとする人達が多いのも無理のないことでしょう。

そして、世の中を見渡せば、そのような人、人、人です。

たとえ、思いは通じるとか、願いは届くとか、そういうことを信じている人も、思いの世界（意識、波動の世界）がすべてであり、目に見えて耳に聞こえる現実の世界は、その思いの世界の影の世界だとは全く思っていないのです。

形で示されているものには確かに実感があります。そして、それらは、自分達の五官、つまり目、耳、鼻、舌、皮膚で確認されるものですが、その確認がなければならない、確認がほしい、確認があってこそ信じられると、殆どすべての人が、そう思っているのではないでしょうか。

そのような社会の中で、目や耳などの五官で確認される世界、つまり、形で示された世界は、実は、思いの世界（意識、波動の世界）の影の世界であり、実体がなく本当の世界ではないということを、私達は自分の肉体を通して知っていく機会を得たのが、今という学びの時間でした。

しかも、それは自分の心でしか分からないことなので、どうぞ、心を見ていくことをやっていきましょうと、田池留吉氏という方が、三十年の長い時間をかけて、形の世界を本物として疑わなかった私達に懇々(こんこん)と伝えてくれたのです。

ここでもう少し、思いの世界（意識、波動の世界）ということについて、そして「心を見る」ということについて語らせてください。

私達から出てくる言葉や、態度には、そのもとになる自分の思いがあります。何かを思っているから、あるいは感じているから、私達は、それを言葉や態度で示していくのです。

その思いの世界を、意識の世界、あるいは波動の世界と言ってきました。その世界を、あなたが「心を見る」ということを通して、あなた自身の心で、じっくりと感じていきましょうということなのです。

どんな言葉を出してもいいし、どんな態度を示してもいいのですが、その言葉を出した、そ

の態度を示した、その時の自分の思いを辿っていこうということです。

言葉を出し、態度を示したときに、どのような思いが心に上がってきたのかを確認するのです。

あるいは、何も語らなくても、態度に出さなくても、見て聞いた瞬間、相手に対して、あるいは物事に対して、瞬間的に心に突き上がってくる思い、エネルギーを感じるはずです。

それを、自分の中で追っていこうということなのです。

人は他人を騙せても、自分を決して騙せません。

たとえば、顔で笑って心で泣いている自分、あるいは顔で笑って心でこん畜生の自分があるとするならば、その泣いた自分、こん畜生の自分が、波動、エネルギーとなって流れていき、その波動、エネルギーこそが実際なんだ、ということなんです。すべてにおいて、形が主ではなく、波動、エネルギーが主です。

実は、「心を見る」という学びが、いわゆる宗

教や精神世界、心理学といった分野ではないという所以（ゆえん）がここにあります。

人は、なぜ、神、仏の道を究（きわ）めようとか、心理学や哲学を学ぼうとするのでしょうか。

道を究める、学問をするといっても、結局は、そういうもので自分を高めていく、立派にしていく、自分の格付けをする、上下関係を作るということだと思います。あるいは、そういうもので、自分を救ってほしい、解決方法を見出したいということだと思います。つまり、それらはすべて形の世界を本物とする土台の上にあります。

難解な仏典、経典、書物を読みこなしても、所詮、それらは知識でしかありません。しかし、知識をいくら頭に詰め込んでも本当のことは分からないのです。人の頭脳には限界があります。だから、人は、さらに、修行を積むのでしょうか。よしんば、一心不乱に精神を研ぎ澄ました結果、心が救われた、心が洗われたようだと感じても、そのあなたが言う「心」とはどのようなものな

のでしょうか。その「心」の土台は何でしょうか。
「心」という実体が解き明かされていないことは、これまでの歴史が証明していると思います。高僧、名僧、悟ったとされる人、愛の人と、歴史上でこれまで名を連ねてきた人達が、今、どのような状態であるか、あなた自身が、ふっとその人達に思いを向けたときに確認できるならば、それでお分かりかと思います。今、その確認が難しい人は、一応、世間の評価を保留にしておいてください。そして、どんどん自分の中のエネルギーを感じていく方向に生きてください。
「本当のことは、あなたの頭では分からない。
　本当のことは、姿、形、言動でも分からない。
　本当のことは、あなた自身が感じていくしかない。
　そして、本当のことを、あなた自身が感じていくには、『心を見る』実践しかありません。
『心を見る』という実践を通してあなたの土台を変えていくしかありません。」と明言します。

さらに、
「宗教や精神世界、哲学、文学、心理学、科学の分野では、私達人間の本質を解き明かすことはできません。」
と結論付けます。

要するに、「『心を見る』という実践がなければ、何も分かりません。生まれてきた意味も、死んでいく意味も何も分からずじまいで、またあなたは今の人生を終えていくのでしょうか。

私達は意識です。今、私達は、肉体という形を持っているけれども、私達の本当の姿は、目に見えないものなのです。このことが、自分の中ではっきりと信じることができるように、心を見ていきましょう。

私達は、心として、エネルギーとして存在し、決して消えてなくなるものではないのです。私達はまさに永遠に生き続ける意識、波動、エネルギーです。」ということなんです。

確かに、この肉体は、時が来れば消滅します。それを私達は、死と呼んでいます。

しかし、死というのは、私達にとって、今の肉体を脱ぎ捨てるひとつの行事にしか過ぎないのであって、死んだから、その人の存在がなくなるのではなくて、その人が纏っていた肉体というものがなくなるだけなのです。ただし、肉体というひとつの形を自分だとして疑うことがなく、その肉体にしがみついている人は、自分は死んだら終わりだと思ってしまいます。その思いの枠の中では、肉体の消滅は自分の消滅ということですから、やがて、また、別の肉体を携えてこの形の世界に出てきたとしても、その繋がりは、その人の中では途切れています。そんな中においては、自分は、心として、エネルギーとして永遠に存在するものだとは決して分かるはずはありません。

人は生まれてきて死んでいき、また生まれてくるという循環を私達は転生と呼んでいますが、

転生してくるという本当の意味が分かっていないと言ってみてもいいと思います。
「なぜ、私達は転生を繰り返してきたのでしょうか」
「私達にとって、この肉体というものはどういう意味があるのでしょうか……」
　さて、あなたはこの問いかけにきちんと答えることができるでしょうか。本書をきっかけにして私も学んでいこうと思われている方は、私はこれまでに、ＵＴＡブックさんのほうから、「心を見る」という学びに関する本をすでに十冊以上発行させていただいていますので、そちらのほうもぜひ参照してください。
　特に、『意識の流れ』『続意識の流れ』『意識の転回』を読まれることをお奨(すす)めします。
　その上で、あなたが、「心を見る」ことを実践されていくにつれて、まだまだ色々と自分の中で疑問、迷いが出てくると思います。
　たとえば日々の生活は生活として実際に流れ

ているけれども、一日一日をこうして過ごしているだけでいいのか、私が本当にしなければならないことが他にあるのではないか、何か飽き足りない、今のままでいいのかという思いが、自分の中に起こってきていることを感じてくると思います。

そうなっていったときに、ぜひ、その自分の思いにもう一歩踏み込んでみてください。素直になって、勇気を持って自分に聞いてみることをしていきませんか。

「自分はなぜ生まれてきたのか」

「自分の人生とは何だろうか」

「本当にこのまま死んでいっていいのだろうか」

たとえば、このようなことを、自分に問いかけてみてください。

中には、その解答を求めて、これまでに色々な書物を手に取ったり、色々な人の話を聞いたり、様々な修行をされたりという人もあるかと思いますが、そのような方も、ここで、一度、「自

分の心を見る」という実践を始めてみてください。「自分の心を見る」というのは、今まで自分の外に答えを求めていたのを、自分の中に答えを探すという作業です。

つまり、自分の心の針の向け先を外から中へ変えていく作業です。

自分の中というのは、具体的に言えば、自分の意識の世界ということです。自分の意識の世界、つまり自分自身は本当はみんな知っているんです。先ほどの三つの問いかけにも、本当はみんなきちんと正しい答えを出せるはずなんです。なぜならば、私達自身が真実だからです。

このあたりのことを、あなた自身も、自分の心を見ていかれて、自分の心で分かっていただきたいと、私は思っています。きっと、あなた自身、あなたの中の真実、本当のあなたに出会えると私は思っています。

本当の自分に出会うことが人生の本当の目的です。

世間では、「人生、色々だ。生きていれば色々あるさ。」そう言われています。それは確かにそうでしょう。確かに、それぞれに人生は展開していきます。人生色々です。しかし、そういう一見、達観（たっかん）したような、そして、一方では諦（あきら）め気分で、自分の人生を眺めるのではなくて、もう少し、自分に対して真摯（しんし）な思いを向けてあげることをしてみませんか。ぜひそうしていただきたいと思います。

この章の冒頭に戻りますが、私は、この学びは、宗教ではないと言いました。

そのほんの一端（いったん）かもしれませんが、次のようなことも、参考までに知っておいてください。

私達の学びには、教祖、指導者、後継者、そういうものは一切存在しません。また、組織として動いてきたわけではありません。

私達には、引き継ぐ具体的なものは何もないのです。この学びには財産もなければ、後継者もいないということです。

過去、田池留吉氏という人を中心にセミナーが開催されてきたことは確かですが、この人は、私達の教祖、指導者という立場ではありませんでした。本来、私達はそういうものは必要としないのです。なぜならば、私達一人ひとりが、偉大な存在だからです。しかし、何をもって偉大だと言っているのか、そこのところが大きなポイントなのです。そのポイントを外せば、まさに天と地の違いがあります。

そのポイントとは、私達の言葉で言うならば、その人の土台です。土台が肉、形にあるのか、それともそうではないのか、それが、生きていく方向を、左、右へと振り分けていきます。

殆どの人は、自分というものを知りません。目に見えている姿、形を指して、これが私、これが自分だと思っています。そして、家柄であるとか、頭脳、美貌、財産等々に恵まれていれば、それらを全部引っくるめて、これが私だとそびえ立つのです。

そのようなものをみんな取り外して、人間裸になれば、みんな同じではないでしょうか。

「いいえ、見目麗しい人もいれば、そうでない人もいるよ」ということかもしれませんが、やがてそういうものは朽ち果てていくのです。間違いなく、時の経過とともに朽ち果てていきます。脳細胞も一日一日、衰えていきます。

由緒正しき家柄も、豊かな財産も、いつ何時、どういうことで傷がつけられたり、失われたりするか分かりません。

とにかくそういうものは、流動的なものです。

第一に、それらは、自分が死んでいくときに、持っていけないものばかりです。

それでは、死んでいくときに持っていけるものがあるのでしょうか。私は「ある」と答えます。

そして、本当に死んでいくときに持っていけるものがあるのだろうかと思っているあなたに、それを、自分自身の心で分かっていただきたいと思っています。

どうぞ、本書をきっかけにして、あなた自身、偽物のあなたではなくて、本当のあなたの存在を知っていく方向に生きていっていただければと思うのです。

本書によって、初めてこのような世界があることを知った方も、そして、これまでずっと学び続けてこられた方も、たったひとつの真実の方向へともに心を向けてまいりましょう。

愛とか死という言葉から何を連想しますか？

愛……

そして、死とは……。

両方とも、漠然としているものかもしれません。

あるいは、人によっては、それらについて、はっきりと自分の思いを持っておられるかもしれません。

世の中には、愛を語る小説、物語も、愛をテーマとした映画、演劇、歌なども数知れずあります。

古今東西、愛は、私達の永遠のテーマになってきたと思います。

そして、一方、死についてはどうでしょうか。

あまり深く考えたくないという思いが強いのではないでしょうか。

しかし、考えてみれば、私達は、一日一日、死に向かって生きています。いつかは、私達は、

みんな死んでいきますが、死を思って、日々の生活を過ごしている人達は決して多くはありません。

明日をも知れない命の瀬戸際にある人達は、死に対して何らかの心の準備を整えているかもしれませんが、それも死を達観するというよりも、やはり死に対する恐怖の思いのほうが強いでしょう。

ましてや、年齢も若くて、身体も元気な人には、死はまだずっと先の話です。自分のこととして実感がないのは当たり前です。

しかし、今は、何が起こっても不思議ではない世の中になってきました。まだずっと先の話だと思っていても、死はある日突然やってくるかもしれません。

愛も死も難しいテーマかもしれません。

しかし、一度、それらについて、あなたも考えてみる時間を持ってみてください。

日々の生活の時間は、慌ただしく流れているでしょうが、あなたの中にある時計の針を、少しゆっくりと動かして、思うとか考えるとか、そのような時間と空間に、自分自身を誘われてはどうでしょうか。

さて、あなたは、愛という言葉から何を連想されるでしょうか。

また、死という言葉からはどうでしょうか。

以下の章より、私自身が、そういうものと関連して浮かび上がってきた思いを語ることにします。

男と女の愛

この世には、男の機能を備えた肉体と、女の機能を備えた肉体があります。性同一性障害とかいうのもあって、なかなかややこしいですが、身体的特徴は、このふたつです。

その男と女、あるいは同性の間で、色々なパターンのドラマがあります。形式は、夫婦、事実婚、不倫、同性愛と、様々です。

いわば、それぞれが愛の物語というものでしょうか。

いいえ、愛の物語というのは正しくないでしょう。

正しくは、愛憎の物語でしょう。

私は、そう思っています。

永遠に君を愛す、誰よりも君を愛す、情熱的にあるいは静かに愛の時間を重ね、身体を重ねても、それだけでは、愛の物語が「憎」抜きに

なる、つまり、本当の意味で愛の物語となることは決してないと思います。

身体的に、精神的に、どんなに満足感があっても、そこに生じる愛には「憎」が付いて回ります。男と女の愛は本物の世界の愛ではないからです。

愛(いと)しい、愛しているよ、ともに生きていこう、響きのいい言葉のようですが、その裏側には、恐ろしいほどのエネルギーが隠されているのではないでしょうか。ご存じですか。

愛するがゆえに裏切りは絶対に許さない、愛するがゆえに愛する人も、そして、自分も追い詰めてしまう、愛深き人の心の底には、このようなエネルギーが渦巻いているかもしれません。

それらのエネルギーが、特異な形となって表面化して、昔から男と女の修羅場(しゅらば)があるのでしょう。

人間の奥深くに眠っているエネルギーが、何かのきっかけで表に飛び出してくるのです。

愛を誓い合った成れの果ては、互いが互いを

殺し合うほどのエネルギーで、自爆していくということだと思います。

人を愛した、心から愛した、だからこそ独占したいと、間違った愛は、マイナスのエネルギーを、どんどん増幅させていくのではないでしょうか。独占したいという思いが、それを阻(はば)むものに対して、戦いのエネルギーを発していくのです。

私は、独占したいという思いは、寂しさから来るものだと思います。

人はみんな根源的な寂しさを抱えて存在しています。

だから、人の温もり、優しさ、癒しに心が惹(ひ)かれるのです。

そして、悲劇が起こります。

裏切りは絶対に許さないと言うけれども、間違った愛は、必ず裏切っていくのです。

裏切っていくから、その愛は間違っていたと分かればいいのですが、誰も本当の愛が分から

ないから、愛を求めては裏切られ、そして、裏切られてもまた愛を求めていくのだと思います。

何度、修羅場を潜り抜けても、男は女を求め、女は男を求めていきます。本能的な欲求とソロバンを弾いて、それを繰り返していくのだと思います。殺し文句に踊って、熱病にうなされて、気が付けば、愛とは名ばかりの泥沼の中にはまっていたという悲劇が始まっていくのです。

泥沼の中に自ら入り込み、泥沼の中で果てなき戦いを繰り広げていきます。しかし、自分達のいるところが泥沼であることに、なかなか気付けないのです。それが悲劇なのです。

泥沼の中にいることを知って、そこから這い出してくることを試みる、それをしていけば、「憎」の部分が、段々と小さくなっていくのだと思います。小さくなっていくだけで、なくなるというわけではありませんが、少なくとも自分の心は軽くなっていきます。

さて、泥沼の中にいることを知って、そこか

ら這い出してくることを試みるということですが、では、具体的にはどうすればいいのでしょうか。

もっと、優しくなっていけばいいのでしょうか。

もっと、愛していけばいいのでしょうか。

いいえ、そのようなことができるはずがありません。

本当に優しくなっていくことがどういうことなのか、分からなくなってしまっているからです。

本当に人を愛することがどういうことなのか、分からなくなってしまっているからです。

本当の優しさも温もりも知らない男と女は、互いが互いの寂しさを埋めてくれるようにと、貪欲（どんよく）に求めていきます。

求めた結果、エネルギーの強いほうが、弱いほうを飲み込んでいくのです。心から愛した、死ぬほど愛した、誰よりも誰よりも愛した、そのような激しくて熱い二人だけの愛の世界なのに、なぜ、それが永遠に続かないのでしょうか。

それは、果たして、本当に愛の世界だったのでしょうか。

　飲み込んだほう、飲み込まれたほう、双方とも自滅していきます。自分達の中の真実が、間違った愛を修正していく方向に促し続けるからです。

　少し、局面を変えます。

　夫婦の仲が睦(むつ)まじく、契(ちぎ)りの堅いことを四字熟語で、偕老同穴(かいろうどうけつ)と言うそうです。

　偕老同穴……、生きてはともに老い、そして、死んでは同じ墓に葬られる、それが夫婦仲睦まじき姿だそうです。

　他に、比翼連理(ひよくれんり)、琴瑟相和(きんしつそうわ)という四字熟語もあるようです。

　世間では、仲睦まじき夫婦としてある姿も、本当の愛を忘れ去った夫と妻、男と女が、本当の意味で、二人がひとつになるには、難しいものがあると思います。

　いいえ、二人が真実を知らなければ、本当の

意味で、二人はひとつになることはできないのです。

世間では、共白髪(ともしらが)までの睦まじき夫婦として通用しても、真実の世界には全く通用しないことを知っていかなければなりません。

腐れ縁というのがピッタリな夫婦、男と女の関係が数多くあるのが、現実の話だと思います。

今では、夫婦別寝(ふうふべっしん)とかいう言葉もあって、付かず離れずがいい関係を保っていくようですが、それも本当のところはどうなのでしょうか。

親子の愛

ある程度、年齢を重ねていくと、自分の親を思うときが多くなると思います。

また、自分自身が結婚して父親、母親の立場になってみて、改めて自分の親を思うこともあるでしょう。

親父(おやじ)さんもいいですが、ここではお袋さんにスポットを当てたいと思います。

ドラマで見たシーンを思い出します。

それは、刑事が犯人を落とすとき、故郷のお袋さんに話が触れるシーンです。頑(かたく)なな犯人の心のヒダがほぐれる瞬間です。

お袋さん……、誰の心の中でも琴線(きんせん)に触れる部分です。

そして、一方では、クソババアと叫びながら、

親を殺す子供もいます。

　お袋さん……と呼ぶ心、クソババア……と叫ぶ心、そのどちらも、どなたの心にもある思いです。

　人間は、その二面性を持っているのだと思います。

　男と女の愛には、必ず「憎」の部分が付いて回るのと同じように、親と子の愛にも両極端があるのでしょう。

　また、親は無条件に我が子は可愛いと思いますが、すべての子供に平等に愛を注いでいるわけではないかもしれません。

　どの子も可愛い、そう思う思いと、この子だけはなぜか憎たらしい、それで悩んでいる親、特に母親が案外多いのではないでしょうか。

　二面性を持つ人間の心の中、果たしてどちらが本当なのでしょうか。

　私は、どちらも本当であって、どちらも本当ではないと思っています。

親父さん、お袋さんを大切にする思いと、クソ親父と罵倒（ばとう）したり、お袋さんを馬鹿にしたり、極道したり、挙句の果てには殺してしまったりする心が同居しています。

一方で、無条件に我が子は可愛いと溺愛（できあい）する心と、我が子がうっとうしくて仕方がない、だから邪険にする心とが同居しています。

それが二面性を持つ人間の心です。本当であって本当ではない人間の心です。

その二面性の心の中で、親と子の間の思いが入り乱れて、色々な結果を生み出していきます。

みんな、自分の本質を忘れ去った結果が、親の立場から、そして、子供の立場から、噴き出してくるのです。

親と子が、本当の愛で自分達の中を繋いでいくためには、それぞれが、本当の自分を知り、感じていく以外にないのです。

そして、本当の自分と出会っていったならば、親子の間柄だから、どんなことも許されるとい

う甘えや、我の言うことを聞けという一方的に牛耳(ぎゅうじ)る思いやわがままは、どこかで修正されるのです。

そうなっていけば、今、社会現象として起こってきているような特異な事件には至らないはずです。大事になるもっと前にブレーキが利(き)くはずです。

誰も、本当の自分というものを知らないから、様々な環境が引き金となって、心に蓄えてきたエネルギーが暴発していくのでしょう。

親子間もそう、男と女の場合もそう、自分の中のエネルギーが暴発(ぼうはつ)していきます。未然に防ごうと思っても無理です。

しかし、自爆して気付けることもあるのです。

自爆しては、元も子もないと言われるかもしれませんが、本来の私達には、形はありませんから、自爆しても、自分というものはなくならないのです。自分を含めて、どれだけ形の世界が崩れていこうとも、その中において、自分の出してきたエ

ネルギーを感じ、自らの過ち(あやま)に、自らが気付いていったなら、それでいいだけです。

　どんなに悲惨なこともむごたらしいことも、すべては、自分のエネルギー、つまりは自分自身を知っていくためにあるからです。

煩　悩

男と女の愛憎のドラマもすごいですが、血で血を洗うドラマもすごいものです。そのようなドラマを数限りなく、そして性懲(しょうこ)りもなく、繰り返してきたのが、私達人間です。

そのような人間達が、滝に打たれ、山を駆け巡り、眠らず、食べずの修行をして、あるいは、身を清め、心静かに写経など嗜(たしな)んでも、煩悩(ぼんのう)を断ち切ることなど絶対に不可能です。

人間は愚かな生物(いきもの)なのです。

生まれてきて、煩悩が芽生えるのではなくて、煩悩を持って生まれてきます。

生まれる、肉体を持つとは、そういうことです。

そして、また煩悩を抱えながら、死んでいくのだと思います。それが、これまでの私達の転生の歴史だと思っています。

「いいえ、違う。

確かに私達の転生はそういうものかもしれないが、私達は凡人。中には、悟ったとされる人もいただろうし、迷える衆生（しゅじょう）を救うために形を変えて、この世に現れたとされる化身（けしん）という話もあるではないか。」

「あなたは、本当にそのようなことを信じておられますか。

信じておられるとしたら、何を証拠に信じておられるのでしょうか。

文献ですか、それとも、どこかの偉い人の話ですか。

本を読んで、人の話を聞いて、ただそれだけで信じられるものでしょうか。

実際にその人達と接触して、直接にその人達から話を聞いたり、あなた自身の目で確かめられたりして、初めて、なるほどそうだと納得するものではないでしょうか。

しかも、現代のように、科学技術万能の時代に、

文献であるとか、言い伝えだけを鵜呑(うの)みにするなんて、何かちぐはぐな話ではありませんか。」

「いいえ、科学だけでは解き明かせないのが、人間の心の世界ではありませんか。神とかの目に見えない世界は、人間には分からない、神のみぞ知る神秘的な世界です。」

そうです。目に見えない世界は、科学のみならず、宗教や心理学、文学などでは解き明かせないものです。

しかし、私達には、その目に見えない世界のことを知っていく能力があるのです。その能力は、最初から私達に備わっていました。

しかし、それは諸刃の剣だったのです。

その能力を研ぎ澄ますためには、煩悩というものをしっかりと見つめていかなければならないという条件で、私達は諸刃(もろは)の剣を自分に用意しました。煩悩を滅却(めっきゃく)するのではなくて、煩悩の中で、決してそれに溺(おぼ)れずに、煩悩をしっかりと見つめ

ていくことが、目に見えない本当の世界を知っていくことに繋がっていくのだと思います。

　そして、煩悩をしっかりと見つめていくには、自分の心を見る以外に方法はありません。

　山を駆け巡っても、世捨て人になろうとも、煩悩というものから解(と)き放(はな)たれることはありませんでした。

　逆に、心をしっかりと見つめていけば、目に見えない本当の世界が自分の心で分かっていき、自分というものが、はっきりと見えてきます。

　そうすれば、自分の中の様々な欲、いわゆる煩悩という実体も見えてくるということなのです。

　だから、「心を見る」ということは、すごいことなのです。

　心を見ていけば、煩悩は断(た)ち切(き)るものではなくて、自分の中で解き放していくものだということが分かってくるからです。

　煩悩は、いわゆる肉体を持った私達の本能です。

しかし、本能のなすがままでは、社会が成り立ちません。

社会が成り立たないということは、私達は、心を見る場を得られないということですから、決してそういうふうにはなっていきません。

そこで、私達は、他の生物（いきもの）とは違って、理性というものも同時に備えています。

煩悩を抱えた人間は、理性を上手にコントロールして、一方では、自らの学習能力を高めながら、時の変遷とともに、複雑な社会を作っていきます。その中で、「心を見る」ことをやっていくというのが、私達人間の本来の姿なのです。

しかし、何度も言うように、人間は愚かな生物（いきもの）です。

実際には、諸刃（もろは）の剣を自分に用意しておきながら、その剣でもって自分を殺してきたのです。

自分を殺す剣を自分で用意する、見方によっては、愚かです。しかし、それほどの覚悟というか思いを込めて、私達は、生まれてきたと見

ていけば、私達人間というものは、すごいと思いませんか。

ひとつ間違えれば、死です。

自分と刺し違える覚悟がなければ、本物は見えてこない、私は今、そのように感じています。

人間の煩悩、欲のエネルギーが、様々なドラマを生み出していくことは、どなたもご存じのはずです。

そのエネルギーの渦の中に巻き込まれて、幾度となく失敗してきた人間が、今度こそはと、その中に身を置きながら、心を見ることをやっていこうとしたのが、今の時間なのです。だから、今という時間、しかも学びに繋がるということは、どういうことなのか、どれほどすごいことなのかお分かりでしょうか。

過去には、心を見るということが分からなかったから、ただ煩悩を滅却すれば、悟りが得られるなどという間違った風潮に流される人も出てきました。

文献では、確かに高僧、名僧、悟った人、愛の人となっていても、果たして、その人達の中から、本当に煩悩というものが消え去っていったのでしょうか。

その人達は、ご自分のことをどのように感じておられたのでしょうか。

そして、今、その人達は、どのように存在しておられると思いますか。

永遠の命、永遠の自分を自分だと知って、その時の肉体を捨てたわけではないと思います。

その人達と実際に出会わなくても、ふっと思いを向ければ、自分の心で感じられる、その能力が、私達には、最初から備わっていると言いました。

文献に頼らずに、また人から聞いた話を鵜呑(うの)みにしないで、自分の心で感じることを、あなたもやっていきませんか。

しかし、早とちりは禁物です。

自分達に備わっているものを研ぎ澄ます、そ

れにはまず、自分の心を見ることを始めていかなければならないのです。

自分の心を見始めることが、自分に備わっているものを研ぎ澄ますことに繋がっていきます。

本来、自分達が持ってきたものを、本当の意味で正しい方向に使っていかなければ、それは、諸刃の剣だから、自らを殺していくことも往々にしてあることを知っていかなければなりません。

私達は肉の愛しか知らなかった

男と女の愛も、親子の愛も、その他、私達人間が愛だと思ってきた愛は、世の中にはたくさんあるでしょう。

しかし、私は、本当に愛といえるものは、ひとつだと思っています。

愛はひとつなのです。

愛がいくつもあるはずがありません。

では、どの愛が本当の愛なのでしょうか。

男と女が描く愛でしょうか。

親と子の間に流れる愛でしょうか。

愛の人が語っている愛がそうなのでしょうか。

私は、そのどれもが偽物の愛だと思っています。

それは、そのどれもが肉の愛だからです。

肉の愛とは？

そして、肉の愛が偽物？

それは、いったいどういうことなのでしょうか。

肉の愛の「肉」とは、私達人間を肉という形としてとらえることを言います。

人を形としてとらえるところから、愛を考える、愛を語る、愛を求める、そういうことがみんな偽物なのだというのです。

しかし、人は人を形としてとらえているから、肉の愛が全くの偽物だというのは、解せないはずです。

「人を愛する心、愛しいと思う思い、慈しむ思い、なぜ、それらが偽物なのか。人の優しさ、温もりにどれだけ心が救われてきたことか」と、言いたいところだと思います。

その通りです。

人と人が争って、互いに攻撃し合うよりも、人と人が愛し合い、仲良く、ともに助け合いながら穏やかに暮らしていくほうが、人として幸せなのも分かっています。

しかし、本当にそうできるのでしょうか。

人と人が愛し合い、仲良く、ともに助け合いながら穏やかに暮らしていくことができるのでしょうか。

答えは、ノーです。

それぞれに、みんな性格が違います。色々な癖を持っています。色々な考え､思いがあります。

それは、みんなそれぞれに色々な背景を抱えて生まれてくるからです。

そして、生まれてきた場所の風習だとか環境に影響されて、いいえ、それぞれに抱えてきた背景が、その場所の風習、慣習、環境を呼び水として、表面に現れてきます。

その表面に現れてきたものが、その人を形作っていきます。

それが、性格とか癖だと思います。

そして、その骨組みの上に、自らの成長とともに社会で得た常識、知識を貼り付け、巻き付けていくのです。

そして、貼り付けたり、巻き付けたりして、小さな枠組みの中に自分を押し入れていきます。

いわば、それは小さな世界です。小宇宙の中で、みんな、我一番をやっていきます。

そのようなちっぽけな中で、人を愛するとはどういうことなのか、本当の愛とはどういうものなのかと、あれこれ探求してきただけなのだと思います。

しかし、小宇宙ではなくて、自分の中の本当の広さを、つまり、本当の自分というものを知っていけば、今まで探求してきたものは、何とちっぽけなものなのかということになってきます。

小宇宙の中しか知らないときは、それでよかったのかもしれません。やがて、その中から飛び出して、少し広い自分の世界が見え始め感じ始めたならば、自分が知ってきたものがちっぽけだったと色褪せてくるはずです。もちろん、人を形としてとらえれば、男と女の愛にも、その他の愛と呼ばれるものにも、それぞれにストー

リーはあると思います。
　しかし、それらは、あくまでも物語の域を超えないことが分かってきます。しかも、それらは、小説や物語などの架空（かくう）の世界の話ではなくて、実際に人と人が織（お）り成（な）す現実の話ということですが、それらもまた、やがては消えていく儚（はかな）い夢幻の世界のものだと感じ始めるのです。
　私は、私達人間というものは、小さな世界にあるものではないことを感じています。
　あの人の心は広い、懐（ふところ）は深いという表現がありますが、それも、人を形としてとらえている限り、小さな世界の中で感じている心の広さであり、懐の深さに過ぎないのです。
　小さな枠組みの中では、本当の愛は分からない、自分を愛し、人を愛する本当の意味は分からない、そう思っています。
　人を形としてとらえるところから愛しい云々（うんぬん）と思うのは、肉の愛に過ぎないということが心で理解できれば、だからこそ、何かもっと違う

目線で、人と人の関係を見ていくことができるのではないかということです。
本当の意味で大らかに、自分を見つめ、相手を見つめ、互いにもっと深い絆(きずな)を感じ合えるのではないかと思います。
ところで、あなたは、ご自分をどのようにとらえていますか。
あなたが、今見ている自分が自分だと思っていますか。
それとも、今見ている自分以外に、自分というものがあると思っていますか。
また、あなたは、自分は永遠に生きるものだと思っておられますか。
その反対でしょうか。
あなたが、自分をどのようにとらえているのか、とらえようとしているのかは、非常に重要なポイントです。つまり土台の問題です。あなたは何を土台にしていますかということに、すべてが集約されていきます。

今、肉眼で見ている自分が自分だと信じて疑うことがない人は、愛を間違えていくでしょう。小さな世界の中で、愛を求め、愛に裏切られて自ら苦しんでいきます。

もともと、愛は求めるものでもなく与えられものでもないのに、人は愛を求めていきます。そして与えられなければ愛に裏切られたと恨（うら）みつらみの思いを流し続けます。

愛は求めるもの、与えられるものと思っていた自分に、自分が裏切られると言ったほうが適切なのかもしれません。

そう思っていた、思ってきた自分が愚かだったと言ったほうが適切なのかもしれません。

ただ、このことはそんなに簡単には納得しません。あなたの土台が変わってくれば、自ずと分かってくるということになります。

本当の愛が知りたい

これまでに記してきましたように、「私達人間の本質は、肉ではなく、意識です」というのが本当のことです。

私達には、生まれてきて死んでいくという転生があります。そして、一度転生をしてくれば、それがひとつの過去世になります。

従って、数え切れないほど転生をしてきた私達人間には、それぞれ数え切れないほどの過去世があるのです。

その過去世達に共通するものは、自分の本質が意識であることを知らなかったことです。

今世の今という時間の中で、私達は、初めて、「肉ではなく、意識だよ」と、はっきりと知らされたのです。

もちろん、私は、今、そのことを、ただ情報として得ているのではなくて、自分の心ではっ

きりと感じています。

　ずっと長く、肉、形を本物としてきた私の過去世達の思い、つまり、私自身の思いを、少し聞いてください。

「私は、自分自身を形あるものと思い込んできました。
　そこから、ずっと、愛を探し続けてきたのです。
　自分の心を満たしてほしいと、愛、優しさ、温もりを貪欲に求めてきました。だけど、求めても、求めても愛は分かりませんでした。
　正確に言えば、自分を形あるものとしてとらえていたから、愛が分からなかったということが、分からなかったということです。
　だから、愛は、最終的に、私を裏切っていったと思い続けてきたのです。そして、もうひとつ、私の誤りは、愛は無償だということが、信じられなかったことです。

いつも、見返りを求めていました。

形を本物とする心の中には、必ず、ギブアンドテイクのテイクの部分があると思います。

ギブが小さくて、殆（ほとん）どなくて、あるいは全然なくて､テイクばかりを期待する。期待するから、それに反すれば、たちまち「憎」の部分が出てくる。形の世界の中での愛は、みんなそのパターンだと言えるのでしょう。その一方で、時には、献身的に愛を捧げてきたこともあったことでしょう。我が身を捧げ､我が命を捧げ､忠誠を誓った愛の中に生きてきたこともありました。

しかし、その結果もまた散々なものでした。

いずれにせよ､みんな偽物の愛だったからです。」

「すべての人達に幸（さち）あれと、神に祈り続けてきた愛の実体を、あなたはご存じでしょうか。

私は、祈って、願って、幸せを求めることの愚かさ、空しさの中に、自分を沈め、神を呪い、神を恨んできた愚かな自分を知りました。

これだけ祈り続けてきたのに、これだけ忠誠

を誓い、何もかも捧げてきたのに、私の求めるものは、何一つ与えられることはありませんでした。いいえ、何一つ与えられるどころか、私から奪い取っていく現実を目の当たりにしたことも、数多くあったことでしょう。それでも、なかなか目が覚めませんでした。
　幸せがほしい、幸せになりたい、そのように願いを込めることが、なぜ、間違いなのか分かりませんでした。」

　今も、なぜ、間違いなのか分からない人達はたくさんおられると思います。人は、一様にして、次のような思いを発しているのではないでしょうか。

「私達には、そんな大それた望みはありません。
　ただ、家族の幸せや安泰を望んでいるだけなのに、そんなささやかな幸せを望むことが間違いなのでしょうか。

なぜ、それがいけないことなのでしょうか。
なぜ、それが欲なのでしょうか。」

あなたは、このような思いにどのように答えますか。誰しも幸せになりたいと思っていると思います。そんな大それたものではなく、ささやかな幸せを望む思いのどこが何が間違っているのかということだと思います。

あなたは、幸せがほしい、幸せになりたいと願いを込める先にあるものは何だと思いますか。

それは、本当の愛を知りたいと探し求めることについても、同じことが言えると思います。

幸せがほしい、幸せになりたいと願いを込めることも、愛を探し求めることも、実はそれ自体が間違いだったのです。

というのも、幸せがほしい、幸せになりたいと願いを込めること、そして、本当の愛が知りたいと愛を探し求めること、それらには、幸せを本当の愛を自分の外から受け取るという感覚

がありませんか。

　みんな、自分の外からやってくる、外にあるものを自分の中に入れようとする、そのような感覚がありませんか。

　その思い方、考え方が違っている、間違っているということなのです。

　また、過去世が語っているようです。

「そうです、私は、ずっと、幸せを愛を自分の外に求めてきました。

　ひたすらに、一心に祈れば、思いは必ず成就（じょうじゅ）する、思いは叶（かな）えられることを信じてきました。

　そしてそれが高じれば、念というエネルギーに変わっていくことも体験してきたのです。

　私にとって、幸せになることも愛を知っていくことも生易（なまやさ）しいものではありませんでした。

　本当のことを知らない心には、幸せになりたいという思いも愛を求める思いも、自分の中で恐ろ

しい生物のように感じてきたことは事実です。
念じて呪い殺すエネルギーは、自らもまた滅ぼしていくことを何度も体験してきました。」

様々な体験を経て、それでも、幸せになりたい、本当の愛が知りたいと、自らに肉体を持たせてきた現実があります。
それほどまでにして、幸せになりたい、愛が知りたいということはどういうことなのか、全く分かりませんでした。何度自滅しても、また、自分に肉体を持つことを請う思い、そのエネルギーはいったいどこから来るのか、長く、ずっと長く、心に留めてきた疑問でした。
肉ではない私達だった、私達には形がないということを心で知って、ようやく、幸せになりたい、愛が知りたいと叫び、貪欲に求めてきた訳が分かります。本当の自分との出会いを成し遂げたかったのです。長く心に留めてきた疑問が解け始めています。

間違った愛を求め続けてきたけれど、そして、それで何度も自滅してきたけれど、それがあったから、ああ、私は、本当の愛、つまり本当の自分を探していたことを知ったのです。私自身が愛だったことを知りました。幸せになりたいと願いを込めなくても、私達は最初から超幸せな存在だったんです。幸せという意味も愛という意味も全く取り違えてしまった愚かな自分に成り果てていったと今は納得です。

そして、その愚かな方向は、その気になりさえすれば、みんな何時（いつ）でも転換していけることを知りました。すべては自分次第だったと、学びに集えた私達は、たくさんの自分から教えてもらえる機会を得てきたのです。

どうでしょうか。こんな幸せな人生が用意されているのです。

どうぞ、自分の心を見るということを実践していきましょう。外に向きっぱなしだった心の針を自分の中に向けて、今世こそ、本当の喜び、

本当の幸せ、そして本当の愛を心で分かってい
く時間としましょう。

もう、私達は、散々苦しんできました。自分
を自分で苦しめてきました。だから、もういい
ではないですか。自分をどんどん許して、どん
どん受け入れて本来の自分の姿を取り戻してま
いりましょう。

心の奥深くに届く愛

心静かに、丹田呼吸をします。そして、目を閉じます。

心の奥深くより伝わってくる思いのままに、キーを打ちます。

「愛とは、何でしょうか。
私は愛、あなたも愛、私達はひとつ、
信じられるでしょうか。
あなたは、ずっと愛を探し続けてきました。
私を探し続けてきました。
実は、あなたはあなたを探し続けてきたのです。
私達は、ようやく、今ここに出会っています。
私は愛です。
愛は、あなたの心、奥深くに眠っていました。
あなたは、愛が分からずに、ずっと彷徨(さまよ)い続けてきましたね。

だけど、それはあなたが気付かなかっただけです。

私は、ずっとあなたを知っていました。

あなたにずっと声をかけていたのですよ、あなたは愛だよって。

ようやく、ようやく、あなたは私に気付いてくれたのです。私は、心からありがとうを言います。

私に気付いてくれた、そして、あなた自身に気付いてくれたのです。」

愛の心は、愛は、溢(あふ)れるほどに私の中にありました。

汲(く)めども汲めども尽きることのない愛の源泉(げんせん)が、私自身でした。

愛を求めてきたことが間違いの始まりでした。

私は私を捨て去って、そして、私以外に愛を求めてしまったのです。その愚かさにようやく心で気付かせていただきました。

私を捨てた時間は、長い長い真っ暗なトンネルの中でした。愛をくれ、愛がほしい、愛に飢えた私は、その真っ暗なトンネルの中で、たったひとり、叫び続けてきたのです。呼べども届かぬ思いばかりでした。返ってくるのは、恨みつらみばかりでした。

「これが愛を求めた結果なのか。
これが神に忠誠を誓った結果なのか。」

偽物の愛をつかまされたと、散々呪ってやりました。散々恨んできました。
裏切り者と罵ってきました。恨んでも恨んでも、罵っても罵っても、心は晴れやかになりませんでした。どうしてですか。なぜなんですか。分からなかった。全く分からなかった。
ああ、そうして、どんなに長い時間を経てきたことか。
ああ、だけど、私の心の中から、ようやく、

なぜ恨んでも罵っても、心が晴れやかにならなかったのかを伝えてくれました。それはあなたが私を捨て去ったからですと伝えてくれました。あなたが私を捨て去ったその瞬間から、あなたの心には真っ黒な真っ暗な蓋が覆いかぶさっていったんです。しかも、それは重くて重くて、全くあなたの心は自由が利かなくなりました。固まる以外になかったのです。そこは冷たくて、そう凍えるほどの冷たさの中に、じっと固まっていくしかなかったのですと伝えてくれました。そして、今、さあ、あなた、私を呼んでごらんとも伝わってきます。

　私は、その思いのするほうに心を向けて、恐る恐る呼んでみました。

　懐かしかった。温かかった。ああ、私はこの思いを、懐かしくて温かい思いを知っていると思いました。そして、恐る恐る呼んでいたけれど、もっともっとしっかりと呼びたいと思いました。

「私は愛だから、心に溜(た)め込(こ)んできた真っ暗な真っ黒な思いを吐き出すことができるのですね。
　吐き出しても、それを包んでくれる私、愛に出会ったから、安心しています。」

「心をどんどん見ていくのですよ。
　そして、心をどんどん自由にしておやりなさい。
　自由になればなるほど、心が空っぽになればなるほど、そこには、また愛という名のあなたが湧(わ)いて出てきます。そのあなたがまた、あなたを包んであげるのです。」

　永遠の時をいただいています。
　永遠の愛の中に誘(いざな)ってくれる自分を感じます。
　私は、目を閉じて、自分を思います。
　目に見える形の自分ではなくて、目に見えない私を思います。その私が、私に伝えてくれているのを感じます。
　私の中から流れ出す愛のエネルギーが、仕事を

していくことを感じるのです。

「あなたは、愛だから、あなた自身を目覚めさせることができるのです。本物の愛、本物の自分と出会うために、肉体という形を持たせていくのです。」

　自分の中から響いてくる思いを、今確かなものとして、自ら享受(きょうじゅ)できる喜びを感じています。

　愛を求め、真っ暗な中で自らを呪ってきた自分自身でした。

　その自分をしっかりと受け止めていくことができる自分と出会えたことの喜びを、今、感じています。

なぜ、人は愛を求めるのか

世相が暗くなればなるほど、命、愛、優しさが求められます。その尊さを見つめ直そうと叫ばれます。

世の中、偽装が大流行（おおはやり）です。

しかし、根本的な偽装に、まだ人は気付いていません。

自分が自分だと思っている自分が偽物だとは、まだ、殆どの人が思っていません。

従って、命も永遠のものだと思っていないのでしょう。

死ねばそれで終わり、簡単に言えば、そういうことになると思います。それなのに、人は、永遠の愛を求めます。

自分は永遠だと思っていないけれど、永遠に生き続けたいという願望があるのでしょうか。そして、愛とは永遠のものだと思いたいから、

人は愛を探し続けていくのでしょうか。

しかし、自分は永遠に生きるものだと思っていない人が、どうして、愛は永遠だと信じられるのでしょうか。

愛は永遠のものだと思いたいだけなのでしょうか。

本当の自分を知らない人が、愛は永遠なりという言葉を出すのは、無責任だと思いませんか。

そのような無責任な人達が、この世では、案外、悟った人、愛の人と尊敬の眼差しで見られているかもしれません。

いずれにしても、そのことを明らかにする術は、人間を形ととらえる小さな枠組みの中では、決して見つけ出すことはできません。

自分をもっと広く、もっと大きく解き放たなければ、何が真実で、本当の愛とはいかなるものなのかは、分かるはずはないのです。

では、自分を解き放つとは、どういうことで

しょうか。

あなたは、今、自分が生きている、存在していると思っている自分から、自分を解き放つということを、考えてみたことがあるでしょうか。

「とりあえず、今を何とかしていこう。今日も一日頑張ろう。一日、一日を大切に爽(さわ)やかに過ごしていこう。」

そんなふうに色々と思いながら、確実に時間は過ぎ去っていきます。

皆さん、一日があっという間に過ぎていくことを実感していませんか。

人によっては、ある目標を設定して、それに向かって日々頑張って、それなりの充実感、充足感、達成感は得られているかもしれません。

しっかりとした時間を過ごしていると思っておられるかもしれませんが、そういう人達も前にもあったように、何かふっとしたときに、妙(みょう)な空虚感(くうきょかん)に襲(おそ)われることはないでしょうか。

前へ、前へ進んでいこうとしているときには感じられなくても、やがて、達成感や充実感が通り過ぎた後、ふっと心に何か空洞、ぽっかりと空いた穴を感じる時期がやってくると思います。

それぞれの世界で、どれだけ自分を磨き、自分に挑戦しようとも、そして、その結果として、達成感や充実感を満喫しようとも、世間の評価を得ようとも、それらが、自分の心の奥底にある空洞を埋めるものではないからです。

空洞は依然としてしっかりとある状態です。

形の世界の楽しみや喜びは一時的なものであるのと同じく、奮闘努力(ふんとうどりょく)して得た達成感や充実感もまた、心の空洞を埋めるに値するものではありません。

しかし、私達にはそれがなかなか分からないのです。

みんな、心の奥底にある空洞に気付けないまま、時間を過ごし続けているのだと、私は思っています。

心の奥底にある空洞こそが、本当の自分を置き去りにしたことからくる人間の根源的な寂しさだと、私は感じています。

だから、どんなに栄耀栄華の中にあっても本当の喜びや幸せには巡り会えないのです。その空洞を埋めない限り、人間は、根源的な寂しさから、解き放たれることはないからです。つまり、私達人間が、本当の喜びや幸せに巡り会うためには、心にぽっかりと空いた穴、空洞を埋めていく必要があります。そうです。その埋めていく唯一の方法は、本当の自分との出会いなんです。

しかし、本当の自分を置き去りにして、空洞をしっかりと持った私達人間は、本能的に、肉の愛を求めていきます。

肉の愛を求めても、空洞を埋めることはできないけれども、人は求めずにはいられないのです。

空洞を埋めるには、本当の自分との出会いが唯一の方法と言いましたが、本当の自分との出会いを果たすには、まず偽物の自分を解き放つ

必要があります。ただ、その手段を私達人間は全く知らなかったのです。

そもそも、人間は、目に見えて耳に聞こえて、触れることのできる中で、何かを探し続けているだけです。

そして、なぜ探し続けているのか、何を探し続けているのか、それが分からないままに、それでも、それぞれに、自分を賭すものを探すのでしょう。しかし、その中で、自分を賭ける、自分の持てるものを注いでいく、そのエネルギーは、いったいどこからやってくるのだろうかと考える人は、殆どいないと思います。

実際に、何かに突き動かされていくかのように、自分が動いていく場合が往々にしてあります。

時には、神業のようなことができれば、あれよあれよという間に、その世界の頂点に上り詰めることだってあるのです。そうなることを目標にして、日々研鑽を積み重ねてきた人の中には、目標は達成されたのだから、それで一時は

喜びを感じるでしょう。しかし、中には、実はそうではないかもしれないと薄々感じている人もあるかもしれません。

　また、その瞬間に自分の力以上のものが何か働いた、そういうことを感じている人もいると思います。

　だから、神に感謝という言葉も出てくるのでしょう。

　何か、目に見えない世界があることを、その人達は、そのようなところから感じていくということなのかもしれません。

　しかし、所詮は、形の世界を信じているから、何かを感じても、その何かが分からないままです。

　そして、思いは、再び目に見える自分を飛躍させる方向へと向いていくだけです。

　そうして、結局は、心の空洞を埋めることなく、華々しい人生も幕を閉じていくのでしょう。

　人生の幕は閉じられても、心の幕は下せないのです。

引き続き、心の空洞を埋めてくれる何かを人は探し続けるのです。

そのために、人は、また、生まれてきます。

そして、違う人生の幕が上がるけれども、これもだめ、あれもだめの返事が返ってくるだけで、いっこうに空洞を埋めてくれるものに出会えないのです。

だから、ああ、私は幸せだと思いつつも、ふっとまた空虚感というか、寂寥感（せきりょうかん）にさいなまれていくのだと思います。

依然として、心の空洞はそのままです。

地位や名誉や財産などを、ひたすらに求めている間は、心が鈍くなってしまっている状態なので、そういうことは、感じないかもしれません。

しかし、そういう人達も、何かのきっかけで心が敏感になる場合があります。

そうなれば、より一層、自分の中でギャップを感じていくかもしれません。自分の今の華やかな現実と、一方で心の中の空虚感や寂寥感を

感じる現実というギャップです。
　たとえ、そうであっても、今更ながら、自分の持てるものをみんな捨てて、自分が今、直面しているものと真向かいになっていこうとするエネルギーは、すでに、自分の中で萎（な）えてしまっているかもしれません。
　結局はこれでいいのだと自分の中で言い聞かせていく以外にないかもしれません。
　苦しい人生です。
　社会からは一定の評価を得ても、自分を偽って、自分を誤魔化していく人生は苦しい人生です。
　一方、社会悪に染まって、どんどん我が身を落としていく人生も苦しいです。
　貧困から自分の心を落とす人生、犯罪に自らの手を染めていく人生、私達は、そのような様々な人生を体験してきたはずです。
　私達は、心の空洞を何かで埋めようとしてきたけれども、結局はみんな失敗に終わったのです。
　失敗を認めることができなかったから、自分

を解き放つことはできませんでした。
　自分を解き放つということは、自分を崩すこと、失敗の自分を自分だと認めて受け止めていくことでした。
　失敗の自分というものを認めることなどできなかったから、受け入れることなどできなくて、自分を見限ってきたから、自分を解き放つことができなくて当然でした。
　このような心の歴史が、どなたの心の中にもひしめいている状態です。
　心に空洞があるということは、本当の自分を知らずにきたからなのです。本当の自分を捨て去ってきたからなのです。
　本当の自分を捨て去って地獄の奥底をずっと這いずり回ってきたのが、私達人間だったのです。
　私は、この事実を、みんなに知ってほしいと思います。
　自分の現実から目を背けずに、しっかりと自分の過去と真向かいになることをしてほしいと

思います。

　心に空洞が開いたまま、ずっと彷徨（さまよ）い続けてきた自分達だったと、一人でも多くの人達に、心で感じていただきたいと思います。

　そして、本当の愛、本当の自分というものを、心で感じて知って、本当に幸せな時間を過ごしていただきたい、そう思います。

　さて、次の章より、愛することや死ぬことについて、もう少し、しっかりと記（しる）していこうと思います。

愛すること

あなたは、自分を大切にしていますか。愛していますか。

人を愛するとか、愛(いと)しい人というのは分かるでしょう。

しかし、自分を愛しているかと、改めて聞かれたならば、さて、自分を愛するとはどういうことなのかと、考える人も出てきます。

自分は大切だ、誰しも我が身が大事なのは当たり前ではないかと思う人もありますが、我が身を大事に思うことと、自分を愛し、自分を大切にしていくこととは、違うことなのだということを、まず知ってください。

自分を愛し、自分を大切にするには、まず、苦しんできた自分というものを知らなければなりません。

苦しんできた自分を知らない人に、人を愛す

ることはできないのです。

あるいは、苦しんできた自分を知らないから、人に愛を求めていくのかもしれません。しかし、自分を本当に愛しいと思えない人に、人を愛することはできません。

もっとも、偽物の世界の中では、偽物の愛が横行していきます。

偽物の愛また愛が、世の中に氾濫しています。

しかし、偽物は偽物でしかないから、いずれそれらは色褪せてくるのです。偽物の愛は、永遠と続きません。やがて、どこかで必ず分裂していきます。自分を知っていけば、愛は求めるものではなかったことを知っていきます。求めずとも、自分の中から滾々と湧いて出てくる優しさと温もりを知っていきます。

自分を愛する心、本当に自分を慈しむ心が、人を愛し、人を癒していくのです。

そして、自分を愛する心、本当に自分を慈しむ心は、苦しみ続けてきた愚かな自分を知って

いくことによって、さらに蘇（よみがえ）っていきます。

蘇る、そうです。自分を愛する心、本当に自分を慈しむ心は、もともと、自分の中にあったのですから。

苦しみ続けてきた愚かな自分を知っていけばいくほどに、本当の意味で自分を知っていくとはどういうことなのかが分かってきます。

それでは、自分を知っていくとはどういうことでしょうか。

みんな、自分を知っているようで知らないのです。

自分が自分を知らないなんて、そんなバカなはずがないと言われるかもしれません。

それは、みんな、偽物の自分ならよく知っていますが、本物の自分を知らないということなのです。

少し、こんなことを考えてみてください。

たとえば、自分の性格とか癖を、いくつか挙

げてみてください。

明るい、陽気である、いじけている、ひねくれている、嫉妬深(しっとぶか)い、素直でない、怒りっぽいなどなどです。

次に、自分の性格だからと、そこで終わるのではなくて、もう少し突っ込んで、今の自分の心の状態を見ることを始めてみてください。

明るくて陽気な性格はよくて、いじけているとか、ひねくれているとか云々は、どうもあまりいただけないということかもしれませんが、一応、それを横に置いて、そこから、もう少し、踏み込んでいきましょう。

つまり、自分の思いを、もう少し突っ込んで見てみる、「心を見る」ということをやってみてください。

一見、明るくて陽気であっても、本当に底抜けに明るいのでしょうか。

なぜ、素直になれないのでしょうか。本当は素直になりたいと思っているのではないでしょ

うか。

　何を怒っているのでしょうか。何で怒っているのでしょうか。

　というふうに、それは、自分の性格だ、性分（しょうぶん）だと片付けずに、それによって、自分の心の奥をずっと見つめていく作業をしてみてください。

　そうすれば、明るくて陽気な裏側の思いが、自分の中に響いてくるかもしれません。

　案外、自分を誤魔化しているかもしれません。

　また、素直になりたいのになれない苛立（いらだ）ちが感じられるかもしれません。

　その時は、素直になれない原因を追究していってください。

　人は、心に様々な思いを秘めています。

　自分の心の奥を覗（のぞ）いてみれば、自分であって自分でないような、そのような感覚に陥ってしまうかもしれません。

　たとえば、自分は根っから明るいと思ってい

たけれども、こんな暗い部分があったとか、恐怖の思いが怒りになっていたのかもしれないとか、自分の違う局面を知るようになると思います。自分であって、自分でないような、しかし、紛れもなく自分だという、何か妙な感覚になるかもしれません。

多重人格の自分があって、どれが本物の自分なのかが分からなくなっていくこともあります。

結論的に言えば、そういうものは、みんな偽物なのだから、安心して、たくさんの自分を感じていけばいいのではないでしょうか。

そうしているうちに、色々な人を通して、色々な出来事を通して、自分から瞬間的に出る思いを感じていくと思います。

それはエネルギーと表現したほうが分かりやすいでしょう。

瞬間的に出る思いを感じて、私は心の中に凄いエネルギーを蓄えてきたと確認できると思います。それが、心で感じられるようになるまで、

自分を見つめていくことが、自分を知っていくことなのです。

表面的に顔を出している肉、形は、その凄いエネルギーを感じていく、いわば受け皿のようなものだと思えるようになればいいと思います。

もちろん、そうしていけば、自分の心癖、思い癖が、はっきりと分かります。

そして、そういうものが自分であり、そのような自分を、ずっと嫌ってきた、疎ましく思ってきたことも感じてくると思います。

自分を嫌い、自分を疎ましく思う、それでは、自分を大切にしているとは言えません。

自分を愛しているとは言えません。

なぜ嫌って、疎ましく思うのでしょうか。

そのような自分であってはならない、そのような自分であるはずがないと、自分の暗い思いから、自分ながらいやだなあと思う思いから、目を背けてしまいます。

背けずに、それを、しっかりと自分の中で確

認して、自分で自分を許していくことが大切なのです。

いわゆる、自分の闇の部分を、何かで紛らわせたり誤魔化したりするのではなくて、自分を自分で受け止めるということをすべきなのです。

受け止めるためには、今まで、外に向けてきた心を、自分の中に向けていく必要があります。

自分の思いを外に向けるのではなくて、中に向けるのです。愛を外に向けて求めるのではなくて、愛を中に向けて求めていきましょう。

そうです。

自分を自分で受け止めることに、エネルギーを注いでいくことが、自分を愛するということです。

自分を愛していけばいくほど、自分の中から優しさが溢れてきます。

その優しさで、その温もりで、人と接するのです。

愛してくださいと求めずとも、自分の中は愛で満たされています。

ただし、偽物の愛が横行している中においては、この愛というものは分からないでしょう。

「愛は外へ求めるものではありません。

愛は外から与えられるものでもありません。

しかし、愛は存在します。

私達は愛そのもの、私達はひとつです。」

偽物の自分を通して、本物の愛、本物の自分を知っていきませんか。

どんなに汚(よご)れ切った自分であっても、どんなに欲まみれの自分であっても、その中には、本物の自分があり、その自分は本物の愛を知っていることに、早く気付いていきましょう。

本物の自分を知っていくことが、愛を流すことになります。偽物の自分しか知らなければ、当然、偽物の愛しか流れません。

愛するということは、自分を愛するということ

とです。

　自分を本当に愛すれば、その人から、本物の愛が流れ、その愛が人を癒し、人を愛していくのです。

　それが本物のパワーです。そして、それこそ、私達が恋い焦がれてきたパワーなのです。

　どうでしょうか。

　自分を愛して、愛して、そして、その自分の中から、本物のパワーを蘇らせてまいりましょう。

死ぬこと

あなたは、これまでに自分の死を考えたことがありますか。

自分が死ぬ、人が死ぬ、それは、どういうことだろうかと思ったことがありますか。

命が大切なのは、みんな知っています。

せっかくもらった命だから大切にしていこう。

一日、一日を大切に生きていこう。

感謝して生きていこう。

いい言葉です。もっともだと思います。

だけど、命とは何。なぜ、命を大切にしなければならないの。

どのように答えますか。

答えられないと思います。

死んでいく意味を知らないからです。命の意味を知らないからです。

昨今は、自殺願望の人が増えています。

死んでしまえば、今の苦しみから逃れられる、みんな消えてしまう、生きていても悲しいだけ、苦しいだけと、絶望の中で、自ら死を選ぶのです。

そして、その家族、近親者達は、死を選んだ人を追い詰めた社会や企業などに責任を求めていきます。

こんな悲しい、あってはならないことは二度と起こしてはならない、こんなことは私達だけで充分だと世論に訴えます。

解決策は賠償です。

死ななければならない状況にまで追い込んだ社会が悪いなどの言い分でしょう。

言い分、考え方、感じ方、思い方は様々です。

しかし、自ら死を選んだ人達が、命の本当の意味を知っていれば、そして、自分というものを本

当に知っていれば、自らの今の時間を断つことはできません。

どんなに辛（つら）くても、どんなに悲しくても、自分で自分の命を絶つということは、自分に対して非常に冷酷なのです。

そして、時間を断つことができると思っている、その思いが無知なのです。自分の時間は、自分そのものです。

そのことを知らないから、無知なのです。

時間を断ったのは、偽物の自分です。

偽物の自分が時間を断っても、自分の時間、本当の自分は絶つことができません。

だから、断っても、断っても、苦しみから悲しみから逃れることもできなければ、それらが消え去ることもないのです。

人は、いずれ、何らかの原因で死を迎えます。

自ら死を選ばなくても、死んでいくのです。

それが肉体という物体を持ってきた私達です。

いずれ、肉体の法則に従って、その機能が止まる時期を迎えます。

医学の進歩で、その時期を、ややずらすことはできても、本来の肉体の法則によって、やがて必ずその時期はやってきます。

どんなに頑強な肉体を持っていても、健康増進に努力しても、偽物の自分の思い通りにはいきません。

ましてや神や仏に、延命する力などありません。

また、憎まれっ子世に憚（はばか）るというわけでもありません。

それぞれが決めてきた時間があるのです。

本物の自分が決めてきた時間に従って、すべてが動いているのです。

肉体を持つという時間は、限られた時間ですが、その中において、するべきことのために、すべてが動いています。

不必要なことは、何もありません。

その限られた時間内に、肉体を持ちたい、生

まれてきたかったと切望（せつぼう）してきた思いと出会うために、すべてが動いているのです。

そのような自分の思いに全く気付かずに、人は、好き勝手な生き方をしているだけです。

死んでしまえば終わりでは、あまりにも哀れです。

死んで花実が咲くものかと、懸命に生きていくことも哀れです。

生きている喜びは、肉体を持ちたい、生まれてきたかったと切望してきた思いを感じるところから、ふつふつと湧いて出てきます。

そうすれば、苦しみや悲しみはそのためにあったのに、それを放棄（ほうき）していくことがどういうことなのか、そして、また、限りない欲望の中に自らが溺（おぼ）れていくことがどういうことなのか、今、肉体を持つ喜びとともに、自分で分ってきます。本当の自分との出会いを果たすために、自分は今、生まれてきたことが分かってくると、死んでいくということも、自ずと分かってくると思います。

つまり、肉体という物体は、時の経過とともに朽ち果てるという法則の中にあるから、その法則に従って、今の肉体を置いていけばいいだけのこと、それが死ぬということなのだということが、心で分かってくるのです。

逆に言えば、本当の自分との出会いを果たすことができなければ、死は、やはり恐怖でしかないと思います。

命の大切さも決して分からないと思います。

本当の自分との出会いを果たし、そして、今の肉体をいよいよ捨てる時期を喜びで迎える、これが、人としての理想の形です。

死を真正面からとらえることができるのは、ただひとつ、本当の自分を心で知ることです。

それ以外には、どんなに神を信じ、祈りを捧げ、成仏を唱えても無駄なことです。

死は恐怖でしかありません。

人は、天国、地獄と言うけれども、本当にそう

いうものがあるのかどうかは知らないでしょう。

知らない、分からない、死ねば自分はなくなる、こういう状態では、死ぬことは、恐怖以外の何物でもないと思います。

死に対して恐怖を持っている人が、なぜ、死んで天国で喜ぶことができるのか、なぜ、天国から自分達を見守ることができるのか、あなたは不思議ではありませんか。

第一に、天国とか地獄とかは、どこにあるのでしょうか。

みんな、天国も地獄も自分の中にあることを知らずに、肉体を捨てていっているのではありませんか。

肉体を自分だとするならば、その肉体の機能が止まってしまった時点で、自分は消滅します。

間違いなくそうです。そのまま時間が経過していくにつれて、肉体細胞は腐敗(ふはい)します。

焼いて骨になれば、その人の存在は本当に消

えるのでしょうか。

人間というもの、自分というものを、どのようにとらえていくのか、それによって、この世的なものを含めて、何もかもが違ってきます。

「自分は死んでも、自分は生きている。」

「自分は自分の中にしか存在し得ない。」

この言葉の意味を本当に自分の心で知る、感じていくことができれば、それが、いわゆる悟りということになりはしませんか。

いいえ、悟りという言葉など出さなくても、それが人間としての本来の姿なのです。

本来の姿をどこかに置き忘れてしまったから、死ぬということに対して、物々しく、仰々しく騒ぎ立てているのだと思います。

太古の昔から、死には、この世とあの世との橋渡し的な思いが込められていたと思います。

ミイラとか、埴輪とともに埋葬するとか、壁画、天井画にも、その思いが表現されてきたと

思います。

そして、今もまだまだ、墓、戒名、供養、命日、それらを重んじることが死者の霊を重んじることであり、それは好ましいことである、そう信じ込んでいます。

現世の契りを来世にまでという思いを込めて、死者の霊を弔う人もあると思います。

すべては、形を本物とするところから発想されています。

ここで、断っておきますが、死ねば、形はなくなるけれども、霊魂として生き続けるという考えも、形を本物とするところから発想されています。

人間を形としてとらえているのです。

従って、そこで言われる、霊魂、御霊と、私が感じている意識、波動の世界とは、全く別物です。

形を本物とするところから発想する死というものは、暗い、真っ暗なのです。決して、喜び

には結び付きません。
　しめやかにお葬式が執り行われる、いつまでも涙に暮れている、その人を偲ぶたびに涙ぐむ、みんな暗いではないですか。
　暗い中で手を合わせて、なぜ、生きる勇気だとか、元気、愛を感じることができるのでしょうか。

本当の自分との出会い

人はみんな、誰一人の例外もなく、本物の自分に偽物の自分を巻き付けて生きています。

しかし、偽物の自分を巻き付けて生きている、存在していることを、みんな知らないのです。知らないで今まで来ました。

唯一、「心の学び」に繋がった人達だけが、そのことを知識として自分の中に取り入れることとなったのが、今の時間です。

その人達は、「心を見る」という情報を手に入れ、言われるがまま、今現在、それぞれが、それぞれの生活の場で実践していっています。「心を見る」という難しさを感じながらも、日々の生活の中で、心を見ようとしていっていることは確かです。

もちろん、「心の学び」に繋がった人達全員が、必ずしもそういうふうにしているとは、言えな

いかもしれませんが、いずれにしても、「心を見る」という情報に触れたことは事実です。

あとは、それをいかに自分の中で確かなものとしていくかは、それぞれが、これからの時にかかっていると思います。

その一方で、「心を見る」ということを知らずに時を刻み、やがて、今の肉体を捨てるしかない人達がごまんといます。

そして、その人達が、今の時代を牽引(けんいん)していっていることも事実です。

だから、世の中、おかしくなってきて当たり前です。

自分達はまともだと思っていても、心を見ない人間、見ることを知らない人間、知っていても見ようとしない人間、みんな狂っているのです。

狂った意識が形となって現れてきます。

段々と、その様子が顕著(けんちょ)になってくるのです。

今、その流れをはっきりと感じている人、ぼんやりと感じている人、全く感じずにいる人が

います。

そして、そのような流れの中で、人間は、自分達の知恵と力を結集させて、より良き未来を作っていこうと、様々な分野で奮闘努力しています。

その結果として、私達は、恩恵と弊害の両面を共有することになります。

そして、私達に、恩恵をもたらすものであっても、弊害を来たすものであっても、私達は、欲望の渦の中に存在していることに違いはありません。

偽物の自分を自分だとする思いが、欲を掻き立てるのです。

「心を見る」ことをやっていき、そして、日々の時間の中で、ゆったりとして瞑想を繰り返していけば、愚かな人間の愚かな営みが、心で感じられてくると思います。

そして同時に、愚かな人間の愚かな営みの中でしっかりと心を見ていくことの嬉しさ、大切

さも、感じてくると思います。

さらに、どうしても、その愚かな自分の境界を、自分自身が越えていかなければならないことを感じてくるでしょう。

愚かな自分を営々と築いてしまったのは、他ならない自分自身だったからです。

偽物は、どんなにしても偽物にしか過ぎません。

愚かな人間とは、どの程度に愚かなのか。

持てるものを持つだけ持っても、その全部が偽物だったから、何の価値もなかったことを、人間は死んでも気が付かないほどに愚かなのです。

だから、生まれてくるたびに、何かを持とうとします。

自分の周りにたくさん集めて、それらによって自分を埋め尽くせば、そこから何か、自分を幸せにしてくれるものを見つけることができると思い込んで、躍起になって、色々なものを求めていくのです。

しかし、所詮(しょせん)、求めていこうとする自分自身

が偽物だから、どれだけのものを手にしようとも、偽物にしか出会えないのです。

愛もその中のひとつです。いいえ、偽物の愛しか知らなかったことこそが、人間の最大の不幸なのだと思います。

偽物の愛は、偽物の自分の心を癒すかもしれません。

しかし、どうでしょうか。

その癒し、救いは、本当にあなたの心をずっと癒してくれて、ずっと、あなたの心の救いとなり得ますか。

あなたは、本当はその癒し、救いは、一時の癒し、一時の救いにしかなり得ないと、心のどこかで知っているのではないでしょうか。

そのような一時のものではなく、本当に心を癒し、心を和ませ、心を潤わせる永遠の愛、そのような愛との出会いを持ちたいと思いませんか。

では、いったいどうすれば、そうなっていくのか、あなたは知りたくはありませんか。

それには、何度も繰り返すことになりますが、まず、今の自分をしっかりと見つめることです。

自分の周りの修飾をひとつひとつ、自分から切り離して、自分を見つめることです。

まさに裸の自分と向き合うことから始めていかなければならないでしょう。

たくさん、自分の周りに持っている人は、やっかいです。

まず、その人達は、今持っているものに価値があると思っている自分の思いを見ていくことから始めましょう。

また、何も持っていない人も、やっかいです。

何も持っていないというのは、自分の意思で持たないのではなくて、持ちたくても持てない人、持つことを拒んで持っていない状態にある人を言います。

このような人達も、それぞれに自分の思い癖、心癖は相当なものだと思います。

それをまずは、しっかりと知ることです。

人間の心の中は真っ黒だ。

この大前提のもとで、しっかりと自分を見つめていきましょう。

そして、真っ黒だから生まれてきたことを知っていきましょう。

本当の自分との出会いは、まず真っ黒な自分との出会いから始まっていくのです。

自分の姿を知らない人（真っ黒な自分との出会いがない人）に、心優しき人、心正しき人、愛深き人など、存在しないのです。

自分を形としてとらえている立場から、どんなに正義を語り、愛を語っても、それは、本当の正義でもなければ、本当の愛でもないことを、その人達自身が、自分の心で気付いていかなければならないと思います。

日本の国においても偽装が大流行（おおはやり）です。

今はまだ、偽装は、食品等の目に見える世界のことですが、世の中は、偽物の正義、偽物の愛が蔓延（まんえん）している状態です。

偽物ですというメッセージが、次から次へと私達人間社会に呼びかけてくるのです。

その呼びかけは、警告ととらえてもいいかもしれません。

それは、形を本物としている人間社会には、確かに厳しいものでしょう。

しかし、その厳しさは、本物と出会いたい、もう偽物のままではどうすることもできないと、切実（せつじつ）に自分達に訴えている自分達の悲鳴だと言えると思います。

「物事を形としてとらえるところから、波動として心で感じる方向へ行きましょう。そうしなければ、何も分かりません」

というメッセージが、それぞれの現象に込められていると、私は思うのです。

それは、厳しいし、なかなか容易(たやす)くは受け止めることは難しいかもしれませんが、そこに、何とも言えない優しさを感じます。

私達はみんな間違ってまいりましたと、偽物の自分が本物の自分に深々と頭を垂れることから、本当のことが始まるのではないかと、今、思っています。

なかなか、深々と頭(こうべ)を垂(た)れることは難しいことも承知の上で、それでも、やはり、そうしていくことが、そうしていくことだけが、自分を幸せに、喜びに導いていくのだと感じています。

今の自分をしっかりと見つめていけば、自分に自分が頭を垂れるその時期も、遠からずやってくることが感じられます。

ごめんなさい、間違っていましたと心の底から懺悔(ざんげ)する機会を、みんなそれぞれに用意していきます。

心の底からの懺悔です。

愚かなことを性懲(しょうこ)りもなく繰り返してきた人

間に、心の底からの懺悔の機会をもたらすもの、それは当然のごとく、大変な現象だということです。

大変なことが起こってこなければ、もはや、気付くことができなくなってしまった現実を直視していきましょう。

今は物騒な世の中です。

いわゆるキレる人種が、うようよしています。

何かちょっとした些細（ささい）なことでキレます。

自分の思い通りにいかないことがあれば、人を殺すことも平気でやってのけます。

僅（わず）かな金品のために、人の命を奪っていきます。

己の欲望のために、人を蹂躙（じゅうりん）していきます。

その手段、方法は、インターネットを通じて事細かに教えてくれます。今はそのような世の中です。

そして、その一方では、人の命の大切さ、尊さを訴え、愛を叫んでいます。しかし、それだって疑わしいものです。

確かに、罪を犯す人達は、心の中の闇の部分が表面に現れてきている人達だと思います。

その人達がどのような家庭環境の中で育ったか、そうなるべき境遇であったのか、ひとつひとつ追跡していけば、気の毒な事情もあるかもしれません。

そうなるべくして起こってきたことかもしれません。

しかし、現に罪を犯し、人を傷つけたり、人の人生を狂わせたりしてしまいました。それはそれで償うべきことだと思います。

それはそれとして、では、罪を犯して刑に服する人達と、模範的なもっともらしいことを滔々と語り、愛を静かに、そして、時には熱く語り、人を愛することの大切さ、命を尊ぶことを訴えている人達と、どのような違いがあると思いますか。

何が良くて、何が悪いのか、何が本物で何が偽物なのか、あなたは何を基準に判断されますか。

あなたが本物だと信じて疑うことのなかったものが、ある日突然、それは偽物だったと知ったとき、どうしますか。
　どうでもいいようなことや、どちらに転んでもそんなに大差はないと思われることならば、ああ、そうか偽物だったのか、世の中こんなものだとなるでしょう。
　しかし、私が言っているのは、自分の根幹(こんかん)に関わるもの、または、関わることで、それは偽物だと知らされたらということです。
　端的に言えば、自分というもの、自分という存在、今、自分が自分だと思っている思い、そういうものが、実は偽物だったとなったならば、どうしますかということなのです。
　まさか、それが偽物だったなどと、簡単に思えません。
　今の自分を自分だとすることを、誰も疑ってはいないでしょう。
　人も自分も、目に見えている自分達（物体）

を指して言っていることなど当たり前です。どんなこともそこから出発しています。言うこと、すること、みんなそうです。

世の中は、それを基準にして動いています。

自分達（物体）の幸せと喜び、繁栄のために尽力（じんりょく）しているのです。

それがこの世の流れです。

その流れを根底から覆（くつがえ）すものがあるとするならば、それは、もはや天変地異しかないことは、薄々感じてきているのではないでしょうか。

ところで、肉の自分を喜びに誘（いざな）うものは、たくさんありました。

まず、自分というものを認めさせることに無上の喜びを感じていく、これは肉を持ってきた人間として、ごく当たり前のことだと思います。

肉を崇（あが）めよ、我を見よ、今となっては、その哀れさをつくづく感じるところですが、肉という形を本物として生きる者にとっては、これほ

どの栄誉はないのです。

本当の自分を見失って、ずっと彷徨(さまよ)い続けてきたという事実、現実と真向かいになることを、恐れてきました。

人間とは、そういうものだと思います。

しかし、自分と真向かいになれずにいる、偽物の自分しか知ろうとしない、これでは、どんなに頑張ったところで、絶対に幸せになることはない、それが、学びと出会い、田池留吉氏と出会った私の出した結論でした。

己の欲心のままに、長い間、神、仏に代表される目に見えないパワーの世界を、自分の外に求め続けてきた私達です。

願いを込め、祈るということの間違いや恐ろしさを知らずにきたのです。

何かあれば、ふと祈りが心に上がってきませんか。

救いを求める思いはありませんか。

何か、摩訶不思議(まかふしぎ)なパワーを期待していませ

んか。

　実は、それらの思いは、みんな本当の自分を忘れ去ったところから発せられるものなのです。

　本当の自分を忘れ去って、手を合わせたり、祈りを捧げたりしていくのです。

　いったい、何に向かって、手を合わせ、祈りを捧げているのか考えたことはありますか。

　ないでしょう。

　手を合わせ、祈りを捧げることがいいことだと思っているからです。

　その行為、いいえ、それをする自分の思いは、自分を冒涜（ぼうとく）している思いなのだということに、気が付いていません。

　それは、自分自身が何者であるのかを知らずに、今まで存在してきた証拠だとも言えるでしょう。

真実を見つめて

偽装、偽装で世の中は大騒ぎしていますが、これは今に始まったわけではありません。

これまでの私達の歴史を振り返れば、すべてが偽装で覆い尽くされてきたのです。

偽装に気が付かずにやってきただけのことでした。

私達は、自分が何者であるのか、自分がどのような存在であるのかを全く知らずに、偽物の自分を土台に据(す)えて、時間を積み重ねてきたのです。

自分自身が偽装に過ぎなかったという結論は、誰にも出せませんでした。

偽装の中で、幸せや喜びを求めてきたことや、愛を語り、正義を唱(とな)え、平和などを求めてきたことに、誰一人気付ける人はいませんでした。

当然、いくら奮闘努力をしても、世の中はま

すます混迷の度合いを増してくるのです。

どこかおかしいのではないか、何か狂っていると、人間の心の暗部が、分かりやすい形となって現象化してきていることを感じている人もあると思います。

ニュースといえば、暗いニュースばかりです。

人を騙したり、殺したり、金の奴隷に成り果ててしまった人間の姿が、毎日のように報道されています。

それは当然といえば、当然の結果です。

そこで、「何かまともなことはないのか。あれも偽物、これも偽装、せめて、我々だけでもまっとうに生きていこうではないか」と思われている人もあるかもしれません。

そうであるならば、自分自身が偽物だった、本当の自分を知らずに偽物の自分を自分だとしてきたことを、どうぞ、まず知っていってください。

自分達が偽装であることに気が付く、これが私達の最大かつ唯一の難関です。

この難関を突破しなくては、私達は、まっとうに生きていくことはできません。

今、私達が感じている幸せも喜びも、そして、正義や愛や平和も、みんな偽装の上に成り立っているものなのです。

偽装は偽装であって、本物ではないから、いずれそれらは偽物であることを暴露(ばくろ)していきます。

どのように現象化していくかは、色々なパターンがあると思いますが、それらは見せかけのものであったことを、必ず示してくるのです。

「何を根拠に、そのようなことが言えるのか。」

それは、私達自身が、真実を知っていこう、本当の自分とはいかなるものなのかを知っていこうとしているからです。

もちろん、ここで言う「私達」というのは、肉、

形の私達を言っているのではありません。

世の中の流れという言葉があるように、それは「流れ」と表現したほうが分りやすいでしょう。

真実を知りたい、知っていこう、知っていくという流れです。

私達は、その流れの中にあるのです。

その流れそのものが、私達なのです。

従って、気付きの促しは、これからますます起こってきます。

自分が自分を促していくのです。

そのためには、偽装、それを土台にして作り上げられたものが、表面に現れてきて、それらがみんな崩れていかなければなりません。

そうです。これから、偽物は、どんどんどんどん崩れていく方向に進んでいきます。

私達には、その作業、工程が必要なのです。

そして、偽装の上には、偽装の世界しか築けなかったことを、それぞれが心で気が付いていく必要があるのです。

偽装の世界は、泡と化して消え去っていく夢幻の世界です。

夢幻の世界をつかんで、消えないでくれと祈りを捧げても、それは全くバカげていたことだったと、いつ、どこで、どのようにして気付いていくのか、それが待たれているのです。

人間は、神とか仏とか、いわゆる摩訶不思議なパワーを貪欲に求めてきました。

それらを、自分達人間とは別格の存在だととらえてきました。

パワーを求める心、ひれ伏す心、畏怖する思い、それらの思いを神や仏や宇宙のパワーと呼ばれるものに対して、どんどん向けていったのです。

それがどれだけ愚かで無知なことなのか、自分自身を冒涜する思いであるかということは、偽装の世界の中では、絶対に分からないことでした。

神に祈りを捧げる、忠誠を誓う、仏の道に精進する、どれもこれも全くの間違いでした。

その間違いは、

人間とは、肉体という形を持っているものだという発想から来るものでした。

これが完全なる誤りなのです。

人間には、形がないのです。人間は、もともと目に見えないものなのです。

しかし、現実には、みんなそれぞれに色々な身体的特徴があります。

目に見えないものが、目に見える、識別できるものを持ってくることに、大きな意味があるからです。

その意味を、みんな履き違えているだけのことです。

では、目に見えないものが、なぜ、肉体という形を持つのか、持つには持つだけの意味があるのならば、それはどのようなものなのかということが、あれも偽物、これも偽物となっていく中で、段々に際立ってくるかと思います。

ここで、提案をします。

偽物の自分の幸せと繁栄のために、全力を注いでいく生き方に、もうそろそろ終止符を打ちませんか。

さらに、次の三点を再度考えてみてください。

何のために生まれてきたのか。

なぜ今があるのか。

本当にこのまま死んでいっていいのか。

自分の生き方を方向転換する時が、どなたにも必ずやってきます。

ただし、それは、世に言うところの生き方の方向転換というのと訳が違います。

それらのノウハウは、もうすでに世の中に溢れ返っています。

いかに生きるべきか、どのような人生を歩んでいくべきか、名言格言、その術は、言い尽くされています。

それらは、ある程度、参考になるかもしれませんが、それもまた、偽装の世界の中でのお話に留まっているとお伝えしなければなりません。

焦らなくてもいいと思います。

じっくりと世の中を眺めていけばいいと思います。

これから、日本の国が、世界の国々がどのようになっていくのか、ひいては、地球そのものがどう変化していくのか、そう遠からず、私達の目に、耳に、届けられることでしょう。

日の出の勢いのように栄えているように映っても、所詮、それらは、偽装社会の中の出来事です。

だから、その繁栄は、何かのきっかけで、簡単に崩れていくのです。

形が崩れて、内部の汚さ、醜（みにく）さが白日のもとにさらけ出されます。

自分達の目の前に展開していく現実を通して、

自分達の愚かさ、無能さを知っていく運びとなっています。

そして、それに拍車をかけていくのが、天変地異です。

そのようなことを経て、私達は、自分の外に求めてきたものの限界を知っていきます。

形は、神を捨てる、信じていたものを捨てていくということになるでしょう。

捨てるといっても、簡単に信じてきたものを捨てることはできません。

捨てざるを得ないというほうが妥当です。

何を信じてきたのだろうか。

何を信じていけばいいのだろうか。

この過渡期（かとき）は、大変な時間です。

大変な時間を経て、ようやく、人間は、自分の中に思いを向け始めます。

自分とは、いかなる存在か。

一瞬のうちに、ことごとく消失してしまう現実を前にして、
茫然自失の状態の自分があるでしょう。
現実を受け止める以外にありません。
完全にお手上げの状態です。
しかし、そこからです。
そこから、私達は出発していくのです。

肉、形を本物とする思いの中で、必死に目先だけの幸せを追いかける毎日であれば、本当にそのようなことが起こってくるのかという思いもあって、今はまだ、非現実的なことでしかないと思います。
人生は一度切り、人間、死ねば終わりという思いは、人間の心の中に根深くある思いです。
だからこそ、今を大切に、命を大切にということでしょう。

そして、大切な今という時を奪うもの、大切な命を奪うもの、それは、自分達の敵でしかありません。

敵とは戦って、勝利しなければなりません。

戦いのエネルギーを出し続けていきます。

これが、今までの私達のやってきたことです。

正義を旗印に、戦いのエネルギーを流してきました。

愛を求めて戦い続けてきましたし、平和を願いながら、戦いのエネルギーを流してきたという矛盾の中にもあったのです。

そのような私達のあり方に、完全にノーの判定が下ります。

それが、これからの時間だと、私は感じています。

愛と死を語っていけば……

思いを語っていけば、愛と死の真実の向こうにあるものは、大きな愛のエネルギー、力強い波動、喜びのエネルギーに直結していくことを感じます。

そのエネルギーは、学びを進めていっている人達は、天変地異という形で示されていくことは、ご承知です。

そうです、愛と死を語っていけば、天変地異に繋がっていきます。

私達と天変地異は切り離せないものだという思いが、私の中にしっかりとあります。

そして、その天変地異のエネルギーの源には宇宙があるのです。

私は、ずっと以前より、宇宙ということに自分の思いが向いていました。

自分の心を見る、そして、瞑想していく中で、自分と宇宙とかＵＦＯとか、天変地異とかは切り離せないものだという感覚があります。

私は、自分は特別だとかそういう思いはありませんが、どういうわけか、宇宙を感じていきたい、宇宙を感じていくことが自分を感じていくことだという思いを強く持っています。

まだまだ、周りを見渡せば、時期尚早（じきしょうそう）だということも分かっていますが、私自身は自分の中の宇宙と、もっと深く対話していこうという思いがあります。

そのために、今世の私の時間を整えてきました。

そして、肉という形を持てば、その形の自分にとらわれていくことは必至です。

しかし、肉という形を持たなければ、真実の自分をしっかりと心で知ることができないのです。

それを知った上で、今、こうして肉を持ち、自分の周りを整えてきたことを感じるからこそ、私達は流れの中にある、流れそのものが私達で

したという思いを強くしています。

　肉という形にとらわれ、いかに他力のエネルギーのほうに心が引っ張られようとも、真実に目覚めていくという私の中の思いは、根強く、根深く息づいていたことに、心から感謝します。その思いこそが、愚かな肉の私をしっかりと牽引してきてくれたこと、だからこそ、今現在の私に繋がっていることを心から感じます。

　今は、日々の瞑想の中で、生まれることと死んでいくことの転生の中で、自分の本質と出会っていく計画を、繰り返し立ててきたことを確認しています。

　何で生まれてくるのか、何で死んでいくのか、何でこうなるのか、全部、自分の計画の中の出来事でした。

　自分はみんな知っていたのです。

　本当の私は、懲りることなく、「あなたは私としか生きていけない」と、何度も何度も伝えてくれていました。その思いと出会うことが嬉し

くて、ありがたくて、だから瞑想は本当に喜びとなっています。

自分を信じてくれていた存在、自分を愛してくれていた存在、それがあった、これは、決して消えることのない事実でした。

私は、その自分とともに生きていくことを、今世の時間に誓ったのです。

本当の自分とともに生きることが、私の真実だったことを知ったからです。

私達は、生まれてきた時点から、何もなしでは生きていけません。

着るもの、食するもの、住むところ、最低限度、それらを要します。

その上に、愚かな肉はまだまだたくさんのものを求めていきます。

生まれてきたからには、幸せになりたいと思います。

実り多き人生、幸せな人生、誰しもが望む思

いです。

どうなればそうなるのかということは、人それぞれの思いや考え方があるでしょうが、根本は、みんな幸せになりたいということだと思います。

しかし、幸せとはどういうことだろうかと考えたときに、私は、やはり人間というものは、幸せの本当の意味を知らないできてしまったというところに、行き着くのです。

幸せも喜びも、みんな自分の外にあるものだと思って、懸命に求めてきたのです。哀(かな)しいほどに懸命に求めてきました。

それは、自分が幸せを感じ、喜びを感じるときは、どんなときなのかと、自分に聞いてみれば、答えは自ずと出てくると思います。

大抵は、幸せを感じ、喜びを感じる何かが必要になってくるのです。

これがあるから、あれがあるから、誰かがいるからということだと思います。

しかし、こういう人もいます。
「何もなくても幸せ、喜びです」
果たして、どうでしょうか。
「生かされている喜びを感じて、感謝の思いが出てきます」という人がいたならば、私は、その人に聞いてみたいのです。
「あなたは、自分を知っていますか」
「あなたは、何によって生かされていると思っていますか」
きっと満足する答えは、返ってはこないでしょう。
「神に感謝」、「神のご加護を」、「仏の慈悲」、そのような言葉を出す人にも聞いてみたいのです。
「神や仏とは、いったい何を指して言うのですか。あなたは、本当に神、仏が存在すると思っておられますか。」
これも同じでしょう。
誰にも答えることはできないと思います。
真実に出会った人などいないからです。

神や仏や宇宙のパワーは、自分達とは別世界のものであり、その世界は、自分達のずっと上にある崇高（すうこう）な世界だとしてきた人間にとって、真実の世界を自分の中で知っていくことは、生易しいものではありません。

無病息災、平穏無事を希（こいねが）う思いが、いかに無知で欲であるのか、愚かなことであるのか、人間はどうしたら気付いていくことができるのでしょうか。

ご先祖様が見守ってくれる、天国から見守ってくれている、このような思いが、全く間違っている、バカげているということに、どうしたら気付けるのでしょうか。

救いを求めても、祈り続けても、どうにもならない状況に我が身を置く以外に方法はないのではないでしょうか。

私は、そう思っています。

それ以外に方法はないと思っています。

人間は、本当の意味で、裸にならなければならないのです。

もちろん、着ること、食すること、寝る場所の最低限度はあっても、「自分の心ひとつで、自分と向き合う」時を迎えなければならないのです。

祈って、祭って、献金して、それで幸せになれると思ってきたこと、幸せにしてくれと要求してきたこと、みんな間違いでしたとなってこなければなりません。

そうなってくるまで、容赦（ようしゃ）なく気付きの促しが訪れてきます。

本物の愛のエネルギーは、優しいがゆえに厳しいのです。

容赦はありません。

１＋１＝２であって、１＋１≠３だ、絶対に３にはなり得ないことを伝えてきます。

しかし、肉、形を本物とする思いは、＝と≠は同じになるようにしろと要求したり、そうなるように仕向けていったりしていくのです。

それが、形の世界の現実であり、常識なのでしょう。

しかし、真実、波動の世界は、その現実も常識も一切通じない世界です。

そして、その世界に、本来私達は存在しています。

本来の私達と、そうでない私達とのギャップがあり過ぎて、今まで、真実は遠く彼方にありました。

それを、今、私達の目の前に引き寄せてくれて、どうぞ、この真実の世界を知っていってくださいと伝えてくれているのです。

今は、そういう時です。

学びを知った人は、今がどういう時であるのか、これからどのような時を迎えていくのか、薄々でも感じておられるのではないでしょうか。

まだまだうすらぼんやりと感じていることも、やがて、それは、もう少ししっかりと感じてくると思います。

様々な出来事、色々な人達から、自分の心に伝わってくると思います。
　だから、今は、ただ淡々として正しい瞑想をする時間を重ねていけばいいのです。

思いに忠実に……

思いが上がってくるままに認(したた)め、ここまでやってまいりました。

失礼ながら、書き記(しる)す内容は、頭で理解できるような内容ではありません。

自分達の生活と直結しているような内容ならば、読んでそうだと頷(うなず)いていただけるかもしれませんが、残念ながら、本書はそのような内容ではありません。

そのような内容は、私自身綴(つづ)れないのです。

また、綴ろうという思いもありません。

分かり易(やす)くしよう、どうすれば、私が言おうとしていることを伝えることができるのかと思うことがありますが、そういうときは、さっぱりとキーが打てないのです。

しかし、いつの日にか、心で理解していただけるだろうと思いながら、私は、やはり、自分

の心に伝わってくる私自身の思いに、忠実になります。
　それは、宇宙を思うことをしてまいりましょうということなんです。
　宇宙、もちろん、それは銀河系云々の宇宙ではありません。自分達の心の中にある宇宙という波動の世界です。
　宇宙に思いを馳(は)せる喜びと幸せを、一人でも多くの方と共有していきたい、していこうという思いで、私は、「ＵＴＡの輪の中でともに学ぼう」というタイトルのホームページを立ち上げています。
　私達に三十年余り真実の波動の世界を、肉を持ちながら伝え続けてくれた田池留吉氏の思いを、私は私の仲間達とともにしっかりと繋いでいこうと、今、学ばせていただいています。
　田池留吉氏は、今はその肉が無い状態でありますが、田池留吉という意識の世界は全く変わらずに、いいえ、肉を持っていた時よりもスト

レートに、私達に真実の世界へ進んでいきなさいと力強く促し続けてくれています。
そして、厳然としてある意識の流れをしっかりと心で受けていってくださいとメッセージを波動で流し続けてくれています。
意識の流れ……、それは次元を超えていこうとする大きな意識の世界の計画です。
肉という形を持ってこの地球上に転生を数限りなく繰り返してきた私達も、もう間もなくこの三次元という次元を後にしていく計画ですと、伝えにきてくれたのが、田池留吉という意識の世界でした。
「ＵＴＡの輪の中でともに学ぼう」のＵＴＡですが、ＵはＵＦＯ、Ｔは天変地異、そしてＡはアルバートということです。
今世、三次元にある私達に意識の流れを伝えるべく、真実の波動の世界は、肉を持ちました。本来、肉を持たなくてもいい意識ですが、意識の流れを伝えるために、三次元にやってきたの

でした。それが田池留吉という肉でした。田池留吉という名前が付いた意識は、私達にその肉を通して真実の波動を伝えてくれたのです。次元を超えていこうという意識の流れのタイムリミットは、300 年ですよと伝えてくれました。

そして、田池留吉という肉を持って次元移行の意識の流れを伝えにきた意識は、そのタイムリミット 300 年の少し前に、再び肉という形を持ってきますということでした。

その時の肉の名前がアルバートというわけです。

私、塩川香世は、今世、田池留吉の肉とともにしっかりと学ばせていただき、次元移行の意識の流れをしっかりと心で受け止めました。だから、私のこの地球上での転生も、アルバートが肉を持って出てくる 250 年後の一回を残すのみとなりました。今、私にはまだ今世の塩川香世という肉があります。そして、田池留吉の意識の世界は、今現在肉を持っていません。今は、そのような状態で、意識の世界を学んでいくと

いう流れになっています。

そして、やがて私の今の肉を置いていく時がやってきます。意識だけになった私自身は、田池留吉の意識の世界と交信する時間を経て、そして、再び、同時期に肉を持たせていただき、三次元最終の時を迎えるという流れです。

意識の流れの計画は順調に滞(とどこお)りなく進んでいることを、どうぞ、あなたの心で感じてみてください。

意識の流れは、次元移行を伝えています。次元移行はＵＦＯとともに、次元移行は天変地異とともに、そして次元移行はアルバートとともにです。どうぞ、意識の流れが伝えている次元を超えていくという大きな計画に、あなたもぜひ乗ってください。

そして、私達とともに次元を超えてまいりましょう。今世の学びをどうぞ、自分の次の転生に繋げ、ともに、ともに必ず次元を超えてまいりましょう。

そして、必ず私達のふるさと、母なる宇宙へ帰ってまいりましょう。

「宇宙は、存在します。

宇宙は、私達の心の中に存在する喜びのエネルギーです。

その喜びのエネルギーが、これから大きく出現していくのです。

天変地異は、決して避けることのできない現実です。

天変地異を喜びで受け止めていってください。

私達は、母なる宇宙へ帰る喜びのエネルギーなのです。

母なる宇宙が、私達に戻ってきなさいと伝えてくれています。

私は、その思いに忠実に、その思いに沿って、これからの時間を過ごしてまいります。」

塩川 香世（しおかわ かよ）

1959 年 3 月大阪市に生まれる。
1991 年 3 月税理士登録。
税務関係業務に従事、現在に至る。

著書／「ありがとう」意識の流れ姉妹編 (2006.8)
「母なる宇宙とともに」I、II (2007.3)(2007.4)
「意識の転回」ver.1.0 (2007.8)
「愛と死の真実」(2008.4)
「あなた、このまま死んでしまっていいのでしょうか」(2009.5)
「第二の人生」－ラストチャンスです－ (2009.10)
「意識の流れ」－増補・改訂版－ (2010.5)
「その人、田池留吉」－田池留吉の世界－ (2010.10)
「続 意識の流れ」－改訂版－ (2010.12)
「宇宙の風」－私達人間は、死んで終わりでしょうか－ (2011.5)
「意識の転回」ver.2.0 (2011.8)
「その人、田池留吉 II」－田池留吉の世界 自然治癒力－ (2011.11)
「磁場と反転」－その人、田池留吉 III－ (2012.11)
「母なる宇宙とともに」改訂版 (2013.4)
「愛、あなたは愛です」(2013.12)
「愛、心のふるさと」(2014.12)
「愛、自分の中の自分」－意識の転回 ver.3.0 － (2015.6)
「ありがとう」－意識の世界への架け橋－ (2016.6)
「続 意識の流れ」－最後は瞑想です － (2016.11)

愛と死の真実

初版発行　2017 年 4 月 10 日
著　　者　　塩川香世
発 行 者　　桐生敏明
装　　丁　　UTAブック編集部
電子図書製作　　朝日めぐみ
発　　行　　一般社団法人UTAブック
　　　　　　奈良県北葛城郡広陵町三吉 345-14
印刷・製本　　モリモト印刷株式会社